テレポーテーション・マン5

T　（2037年
JAXA宇宙飛行士訓練棟）

○　訓練棟・屋上（早朝）

ほの暗い空。

屋上のエレベーターから、福井良平（63　JAXA理事）と町田百合（43　JAXA訓練担当）に付き添われて、宇宙服の岡田鉄男（32　テレポーテーション・マン）が、電動カートに立ったまま乗って出てくる。

カートには、体温維持のエアコンが。

福井「もうすぐマーズ8号が右から登ってくる。
訓練のタイミングを思い出してテレポートするんだよ。
失敗したら、ここへ戻ってくればいいから」

うなずく鉄男。

町田「無理するんじゃないわよ。わかった？」

鉄男うなずく。

町田「あ、登ってきた」

薄明るくなりつつある4月の夜明けの空を背景に銀色に光る2つの小さな点。

ISS3とマーズ8号が山々の間からかなりのスピードで移動。

町田「冷却装置をはずすわよ」

バックパックに繋がったパイプをはずし、密閉する。

角度が70度ぐらいになったとき

福井「今だ！」

鉄男の姿は消える。

町田「アアー」

福井「ほんとにアアーだね」

町田「大丈夫なのでしょうか。

ほんとに移住船に飛び乗れるのでしょうか、鉄男君」

福井「無責任のようだけど、わからない。ただ祈るだけ。さあ、降りようか」

と、電動カートを屋上エレベーターに向けたとき、背後でドサっという音。振り向いた時、そこには一体の宇宙服が。

福井「エッ？」

町田「エッ？　まさか」

福井「そんな！」

近づく町田。

宇宙服に手を掛けてゆすぶる。

福井、ヘルメットの中を覗き込む。

福井「見えない」

とサンバイザーを上にスライドさせる。

福井「おおっ、鉄男君だ！」

町田「ほんとですか」

と彼女も覗き込む。

町田「違いますよ。
彼じゃありません」
福井「どうしてそう言い切れる？」
町田「ほら、頬に大きな切り傷が」
福井「ああ、そうだ、彼じゃない。
（左手首のバイタル・インジケーターを覗き込み）、おお、生きている」
町田「じゃあ、下へ運んで気圧調整を」
福井「しかし・・・」
町田「しかし、なんです？」
福井「宇宙服だけで４０ｋｇ以上あるから、体重６５ｋｇだと１０５ｋｇ。
どうやって持ちあげるか」
町田「ああ、そうですね。
ああ、今日は大井先生がいらっしゃるから、呼んできます」
福井「そうか、
それじゃ頼む」
エレベーターに乗り込む町田。
しゃがんで、宇宙服を点検する福井。

しばらくして、町田に連れられた大井明（52　ＪＡＸＡ医師）が、訓練生一人を連れてやってくる。

大井「なんですか、大変って。

あれ、こんなところに宇宙服」

福井「さっき出発したはずの鉄男君が、戻って来たらしい、たぶん。

下に運ぼうと思うが、重すぎて」

大井「気を失っているんですか」

福井「そのようだ」

大井「まさか死んでいるんじゃ」

福井「左腕のバイタル・インジケーターには、0・3気圧、体温38℃、それに脈拍も」

大井「じゃ生きてるんですね」

福井「たぶん。

とにかく持ちあげて、カートに乗せなきゃ」

大井「わかりました。

じゃ、みんなで」

町田「やりましょう」

福井と大井と町田と訓練生4人でやっ

とのことで持ちあげ、電動カートに座らせる。

町田、冷却装置のパイプを宇宙服に取り付け、鉄男の体を冷やす。

そしてエレベーターに。

○同・減圧室（朝）

カートに座ったままの宇宙服の男。

大井「今、訓練生の早朝訓練中で、帰ります。なにかあったら呼んでください」

福井「わかった、ありがとう」

大井と訓練生は出てゆく。

町田「宇宙服の加圧ボタンを押しました。しばらく待ちましょう。先生、コーヒー淹れてきますね」

福井「ああ、ありがとう」

隣の観察部屋に行く町田。

暫くして2個のマグカップを持って帰ってくる。

町田「先生、気が付いておられました？」

福井「え、何を」

町田「この宇宙服、さっき出発したとき着てたものと違いますよ」

福井「ああ、そういゃあ」

町田「いったい何が何だか」

福井「ふーん」

眉をしかめてコーヒーを一啜り。

鉄男は宇宙服のままカートに座らされている。

そのとき鉄男の眼が開く。

鉄男「むむむー」

壁際にいた福井が寄ってくる。

福井「おい、君！　わかるか」

鉄男、福井の顔をまじまじと見つめる。

鉄男、通信キャップのスイッチを入れて、くぐもった音声で答える。

鉄男「福井さん」

福井「君は岡田鉄男君か」

鉄男「はい、そうですけど、福井さん、

町田さん、なぜここに居るんですか？」

福井「それはこちらが聞きたいところだ。マーズ8号に出発したと思ったら、直後に屋上に降りて来て」

鉄男「いったいここはどこですか。それから今は何年ですか」

福井「なにを変なことを。2037年のJAXA訓練棟に決まってるじゃないか」

鉄男「2037年。じゃ振出しに戻ったってこと・・・」

町田、鉄男の頬の傷を見ながら

町田「この傷どうしたの」

鉄男「話します」

と言ったとたん、また失神。

福井「たいへんだ」

○同・医務室

宇宙服を脱がされた鉄男が白のガウンを着て、ベッドに横たわっている。

目を見開き、起き上がろうとする。
もがくが、起き上がれない。
机に向かっていた大井医師が近づく。
大井「どうしたんだ。
　起きたいのか」
鉄男「ええ」
大井「じゃ、手伝おう」
　と、鉄男の背中を押して、座らせる。
大井「どうだ、気分は」
鉄男「腹が減りました」
大井「なんとまあ。
　君はのんきだね、腹が減ったとは。
　食堂から出前を取ろう。
　なにがいい？」
鉄男「カツどんがいいです」
大井「ほんとは少し待った方が安全なんだけどね」
○同・机の前。
　鉄男が猛然とカツどんをむさぼる。

食べ終わり、お茶を飲む。

そこへ福井が入ってくる。

福井「鉄男君、君に逢ってもらいたい人がいる」

鉄男「どなたですか」

福井「火星協会の日本支部長さんだ」

鉄男「わかりました」

福井「もうすぐやって来るはずだ」

鉄男「あの、私から行きましょうか」

福井「いや、元気そうだけど、やはり君の体が心配だ。

安静にしていてくれ」

鉄男「はい」

しばらくしてドアがノックされる。

福井「どうぞ」

ドアが開いて、町田に案内されて一人の初老の外国人が入ってくる。

町田「いらっしゃいました。

どうぞ」

ピエトロ・カニング（55）「（日本語で）福井さん、連絡ありがとうございました」

福井「お呼び立てして申し訳ありません。ことは急を要しますので。

鉄男君、この方が火星協会日本支部長のカニングさんだ」

鉄男、立ち上がり、頭を下げる。

体がふらつく。

鉄男「岡田鉄男と申します。どうぞよろしく」

カニング「こちらこそ。

あ、どうぞ座ってください。

それで・・・」

福井「電話では話せなかったことがあります。火星の東キャナルの安全についての情報です」

カニング「安全？」

福井「そうです。

実は、この岡田君は、百年の時間を越えて未来からやって来たのです」

カニング「え？」

福井「といってもそう簡単には信じてもらえないかもしれません。

私も半信半疑ですが」

鉄男「じゃあ、もう一度お話しします」

こうして時計の針が一時間後を指す

カニング「１００年後の未来から来た？」

福井「不思議な話だけど、私は信じます。

だってそこの宇宙服、現代のものじゃないし」

カニング、立ち上がって宇宙服を検分。

カニング「そりゃあそうだな」

福井、手元のファイルを見ながら

福井「２１４８年の火星と地球の距離は５９００万Ｋｍ、それを一瞬で越えると言うのは・・・」

カニング「君は意図して跳んだのか？」

鉄男「冗談じゃありません。

そんなこと思いもしません」

福井「じゃなんで」

鉄男「アメリカとイスラエルの火星攻撃船が爆発した威力で、私の乗った船は破壊されたはず。そのエネルギーのせいかもしれません」

福井「あの、ちょっと待ってね。ＮＡＳＡに電話してみる」

福井、携帯電話を取り上げて発信。

福井「ああ、ティム。

鉄男君はマーズ８号に着いたかね」

ティム・マクニール（５９　ＮＡＳＡ火星移住担当）「いゃ、着いてない。ちょうどこちらから、どうなっているか、問い合わせしようとしてたとこだ」

福井「ああ、そうか。

こちらも、出発後の行方が分からなくて困っている。

判り次第連絡する、じゃあ」

通信を終える。

福井「ＮＡＳＡにはほんとのことを言えなかった。
とても信じてなどもらえない。
さあ、これからどうする」
鉄男「私が出発して何時間経っているんですか？」
福井「７時間余り」
鉄男「私がマーズ８号に瞬間移動して４時間ほどで乗員に逢っています。
ということは、私はまだ到着していないってことになる。
これはたいへんだ。
早く行かなきゃ」
町田「でも、さっき出発した鉄男さんはどこへ行ってしまったの」
福井「これはよく考えないとタイム・パラドックスを引き起こしかねない」
町田「何です、そのタイム何とかって」
福井「同一時空に同一人物が存在しえないルールが破られた可能性がある。

もし、それが実現すると、どちらかが消えないといけなくなる。

となると、最初の鉄男君は消されてしまったのかも」

鉄男「とにかく、私はなにがなんでもマーズ8号にテレポートしなきゃ、マーズ7号の人たちが危ない。

次マーズ8号がこの空に登ってくるのはいつですか」

福井「6日後の朝3時ごろ、東の空に」

鉄男「じゃ、その時刻に跳びます」

福井「ちょつと待ってくれ。

町田君、今の彼にそんなことできるのか」

町田「一通りの検査はしましたが、異常はないと、大井先生がおっしゃってました」

カニング「ちょつと待ってください。

そのイワン・ドブゾロフというロシアの大統領だが、ほんとに世界をかき乱しているのか」

鉄男「はい。

中国を侵略し、旧ソ連邦の国々も征服し、EUと戦っています」

カニング「北朝鮮は？」

鉄男「完全にロシアの属国となりました」

カニング「イスラエルは？」

鉄男「アメリカの国力の衰退で、行き場を失い、アメリカのニュー・メキシコ州を与えられて、新イスラエルとして建国しました」

カニング「そう簡単に国土を与えられたのか？」

鉄男「いいえ、ニューメキシコの住民が反旗を翻し、内戦状態のようです」

カニング「君は2度に渡ってロシアの攻撃を受けたことになるのか」

鉄男「ええ、そうです」

カニング「ロシアの国力は？」

鉄男「中国を支配下に置いたことで、世界一の力を持っています」

カニング「アメリカとイスラエルの侵略と言ったが、それなら遠からずロシアも火星に」

鉄男「まず間違いないでしょう」

カニング「イワン・ドブゾロフという男は2148年には何歳だろうか。60歳とすると、生まれたのは2080年あたり。これは今から対策を練らないと」

福井「対策って」

カニング「彼が大統領になれないように細工をするんですよ」

福井「暗殺？」

カニング「いやいや、暗殺などしたら、かえって彼が英雄扱いされかねません。若いころに、出世の道を塞ぐんです。誰にも気づかれぬ方法で」

福井「まるでスパイ映画だね」

カニング「火星協会員のあなたもご存じないでしょうが、火星協会も秘密の諜報機関があります。暗殺よりも面倒ですが、少なくともロシアなどより人間的です。

今まで暗殺したことなど一度もありません。

それから2148年のアメリカ大統領はなんという人物ですか」

鉄男「ジャック・ドレーンという男です。

ニクソンやブッシュやトランプを輩出した暴力的な党の出身です」

福井「へエー」

鉄男「これで火星協会さんへの報告は終わりです。

どうか、ドブゾロフとドレーンの侵略をとめてください」

カニング「ええ、やりますとも」

福井「しかし、そんな風に歴史を改変すると、かえって地球は危なくなるかも」

カニング「イスラエル・アメリカ・ロシアの暴力でここ数年で200万人が死んでいる。

これより悪い結果は予想がつかない。

やらざるを得ない」

鉄男「ああ、それから2140年の地球から

のマーズ号発進のときには、着陸船のエアロックの隔壁遮断を内側からしっかりかけて、ロシア兵が入ってこられないように」

カニング「わかりました。

リンカーンとオリンの2つの人工知能に、覚えさせておきます」

○JAXA医務室

鉄男が、ベッドから起きて歩こうとするが、足がもつれる。

そこへ町田が入ってくる。

町田「鉄男君、何してるの」

鉄男「ちょっと買い物に」

前田「火星の低い重力の元で、何年も暮らしていたから、筋肉が弱ってるのよ。

何が買いたいの」

鉄男「キャリーちゃんへのお土産です」

町田「まあ」

鉄男「しかたない。

買い物お願いできますか」

町田「ええ、いいけど。
でも大きい物はだめよ」
鉄男「はい。
スケッチブックとノート3冊ずつ。
それからクレパス。
それに太い芯のシャープペンシルとその芯
と消しゴム2個。
それから白い柔らかいボールを3っっほど」
町田「なにそれ」
鉄男「昔、三角ベースボールで遊んでいたと
き使ったボールですよ」
町田「ああ、そうか。
うん、わかった。
何とかしましょう」
鉄男「これ、財布」
町田「え」
鉄男「最初に宇宙服に着替える時に脱いでい
った私の服の中にまだありました」

○　JAXA訓練棟・屋上（朝）

暗い空。

屋上のエレベーターから、福井と町田に付き添われて、宇宙服の鉄男が、電動カートに座ったまま乗って出てくる。

町田「冷却装置を外すわね」

福井「もうすぐ8号が西の低い位置に登ってくる。訓練のタイミングを思い出してテレポートするんだよ。あれ、これと同じこと前に言ったっけ」

町田「言いましたよ」

福井「なんかおかしな気分だな」

そのとき西の地平線に近い位置に小さな光る点が。

福井「あれだ！」

鉄男「いってきます」

脇にお土産の入ったアルミケースを縛り付けた鉄男の体は消える。

○地上３９０Ｋｍ上空（朝）

鉄男の横を巨大な８号が高速で通り過ぎようとする。

鉄男「秒速８キロ！」

鉄男、さらに８号を追いかけてテレポート。

○地上４００Ｋｍ上空（朝）

一瞬、８号の先端のエアロックを確認して再びテレポート。

エアロックの前に近づいた鉄男。

鉄男「今だ！」

鉄男、消える。

○マーズ８号着陸船のエアロックの中（朝）

現れた鉄男、激しく壁に背中から激突。

急いで加圧ボタンを押す。

今度は失神は免れる。

Ｔ（１時間後）

眠っていた鉄男、目を覚まして、泳いでエアロックの入り口に。
緑に光る大きなボタンを叩く。
すると隔壁が開く。

○着陸船操縦室（朝）

平服に着替えた鉄男入ってくる。
ホイールの医務室と操縦室へと続く二つの隔壁を眺めて、
鉄男M「えーと、まだ5時か。
まだみんな眠（ねむ）ってるな」
そして、医務室へと続くスポーク隔壁へ。

○ホイール・医務室（朝）

スポークから入ってきた鉄男、ベッドルームに入り目を閉じる。

○回転ホイール操縦室（朝）

目覚めた鉄男が入ってくる。

固定された横長のテーブルと、やはり固定された椅子が6脚。

そこに、老人と、若い女性と、小さな女の子が座っていた。

ステファニー・ミラン（32　医師）を見つけた鉄男。

鉄男M「あっ、ステファニーさんだ。相変わらず優しそうだ。でも彼女は人の嫁さん、今度は決して手を出してはいかんぞ、鉄男」

ジョン・ダーウェル（76　農業学者）「えっ？」

ステフ（32）「えっ？」

キャリー・ミラン（3）「ママ、そのひとだれ？」

鉄男「こんにちは」

キャリー「あっ、あなた私のダディでしょう？ねえ、そうでしょ？」

鉄男「違う。君のお父さんは・・・」

ステフ「そこでストップ。
あなたほんとにだれ？」
鉄男「申し遅れました。
私は鉄男という者です。
テツオという発音しにくいようなので、
テッツオと呼んでください。
地球から宇宙船を使わずに、宇宙服を着て
瞬間移動でやってきました」
ステフ「あなたがＮＡＳＡから連絡のあった
テレポーテーション・マン？」
鉄男「そうです。
あなたはゼネラルドクター―のステファニー・ミランさんですね。
あなたのことをステフって呼ばせてください。
そのお子さんはあなたの娘さんのキャリー。
そしてそのお隣はワールド・フード・サプライの元ＣＥＯのジョン・ダーウェルさん（７６）」

ステフ「なんで知ってるの？」

鉄男「ＮＡＳＡの方から教えていただきました」

ステフ「驚いた！

それでどうしようっていうの」

鉄男「このマーズ８号を、瞬間移動を繰り返して、マーズ７号を助けに行きます」

ステフ「ほんとにそんなことできるの？」

鉄男「できます」

ジョン「地球から、宇宙船を使わずにやって来たんだから、これはひょっとすると、ひょっとするぞ」

鉄男「あの、とても重要なことをお話しするのを忘れてました。

マーズ７号と連絡取れますか」

ステフ「今はだめ。

もし、連絡して、あの人たちを助けられないと分かったら、そのショックは大きくなるから」

鉄男「助けられます。

助けられるんです」

ジョン「どうしてできるとわかるんだい」

鉄男「それは今は話せません。

とにかく早くしないと、7号の移住者の3組の夫婦が自殺するんです」

ステフ「なんであなたがそんなこと知ってるの？」

鉄男「それも話せません」

ジョン「なんだか深い訳がありそうだね。

NASAの指示はもっともだけど、もし、彼の言うことが正しかったら・・・」

ステフ「うーん。

じゃあ、やらせてみようか」

鉄男「ありがとうございます」

ステフ「じゃあ、こっちに来て」

と通信操作卓へと鉄男を招く。

ステフ「発信してマーズ7号に届くのが12分後。

それから7号から返事が来るのがやはり12分後。

話が間延びするから、短く的確に伝えてね」

鉄男「はい、わかりました」

ステフ「じゃあ」

M7と刻印されたボタンを押す。

ステフ「どうぞ」

ヘッドセットのマイクに話しかける鉄男。

鉄男「マーズ7号のランカスター船長へ。

ランカスター船長へ。

こちらマーズ8号の鉄男と申します。

7号を救助できる目途が立ちました。

そのことを今すぐ移住者全員に知らせてあげてください。

御願いします。

ご返事お待ちしています。

以上」

ステフ通信終了ボタンを押す。

ジョン「さあ、待つ間が心配だな」

T（14分後）

ランカスター「マーズ8号、マーズ8号。こちらマーズ7号のランカスターです。連絡ありがとうございました。姿勢制御の不調で、宇宙船の内部は暗い雰囲気で息が詰まりそうでした。おかげでみんなの表情が明るくなりました。またなにかあったら連絡お願いします」

そこで連絡が途切れる。

ジョン「なんとしてでもテレポートを成功させなきゃ」

もう一度、鉄男は通信ボタンを押す。

鉄男「ランカスターさん、もう一つ大事な話があります。マーズ7号のパイロットにジェシー・ダグラスさんが搭乗なさっていますね。そのダグラスさんの恋人のミランさんが、このマーズ8号に乗っていらっしゃいます。ぜひ2人に話をさせてあげてください。

御願いします。
以上」

驚くステフ。

ステフ「なに？
なにを言ってるの？」

鉄男「この情報もＮＡＳＡからもらいました。
悲しい別れ方をしたお二人に４年間のほころびを繕ってもらいたいと思います」

ステフ「訳が判らない。
今頃になってどうして・・・」

ジョン「よかったじゃないか。
ジェシーにまた逢えるなんて」

ステフ「でも・・・」

ジョン「まあ、コーヒーの一杯も飲んで気を落ち着かせよう」

とコーヒーのポットを手にして、コップを４つ用意する。

キャリーにはオレンジジュース。

３人は黙ってコーヒーをすする。

キャリーは不思議そうに母の顔を眺め

ている。

そのとき、通信回線が開き、モニターにジェシー・ダグラスの姿が。

ジェシー・ダグラス（34　ステフの元恋人）

ステフ、さっきの映像で君の姿を見られてホッとした。

この通信は時間がかかるから、いつか逢ってから話そう。

じゃあ」

モニターが消える。

涙を浮かべるステフ。

○着陸船・操縦室（朝）

4人がベルトを締めて座っている・

鉄男「あの、手をつないでもらえませんか。

テレポーテーションを確実にするために。

それからリンカーン、中央のモニターに月を映しだして。

表示は原寸大で」

鉄男、心を静めて月に意識を集中する。

右に少しずつ移動する月。

静まり返る機内。

鉄男、月が移動したあとの空間に意識を集中。

鉄男、空間を折り曲げて月を引き寄せる。

次の瞬間、スクリーン右半分に月の表面が大きく表示される。

ステフ「リンカーン、月の画像を拡大したの？」

リンカーン「いいえ。そこに見えているのはカメラからの原寸画像です」

ジョン「ええ？」

ステフ「やった！　やったのよ！」

キャリー「ママ、なんのこと？」

ステフ「あれはね、ほんとの月よ。やってきたのよ、月まで」

ジョン「驚いたな！　こんな事があるなんて」

鉄男「これから毎日、朝７時、昼１２時、夕

方5時にテレポートします。
それぞれの食事は、テレポートし終わってからにしてください」

T（正午）

○同・操縦室

操縦席の鉄男。

鉄男「ステフ、さっき話した頭の冷却キャップを用意していただけましたか」

ステフ「ええ」

棚から柔らかいゴムのようなキャップを取り出し、彼の頭に被せるステフ。

鉄男「リンカーン、モニターに、火星までの軌道を。
それから赤緯と赤経をワイヤー表示して」

星々の間を遠くに伸びた赤い線と、細い縦横のワイヤーが描かれる。

鉄男「その赤い線の先端が火星だね」

リンカーン「はい」

鉄男「これで大まかな位置がわかりました。
それでは、ここから３８５０００Ｋｍ先の
７号進路上に、昨日の月の画像を同じ大き
さで表示して」
リンカーン「はい」
鉄男「じゃ、昨日と同じだけテレポートして
みます。
あの感覚は覚えていますから」
ステフ「みんな、ベルトをもう一度確かめて」
鉄男「じゃ」
静かな時間が流れる。
瞬時に空間を歪め、ジャンプ。
直ちにモニター上の月が消える。
ジョン「成功？」
ステフ「そのようね。
後ろの画像を見てみましょう」
ステフ、カメラの切り替えノブを。
モニターには、後方のパラボラ越しに
影になった月が
ステフ「月の裏側が見えてる。

成功ね。

テッツオ、大丈夫？」

鉄男「ええ」

ステフ「じゃ、みんな休んで。

私は今から、ヒューストンに連絡を取るから」

鉄男、ベルトを解いて離れようとすると、よろける。

ステフ「大丈夫？」

鉄男「ええ」

ステフ「ジョン、テッツオにタンパク質とビタミン類をたくさん摂らせて」

ジョン「わかった」

〇ホイール操縦室

スピーカーからリンカーンの声が。

リンカーン「ヒューストンからの緊急連絡です」

ステフ「なにかしら？」

鉄男「マーズ号の進路修正ですよ」

ステフ「何言ってるの。
なんでそう言うことが分かるの？」
鉄男「まあ、色々ありまして」
ベッドルームから出た3人。
ステフ、通信スイッチを入れる。
モニターに、ミッション・コントロールセンターを背景に、マクニールが現れる。
マクニール「やあ、驚かせてすまない。
懸案事項が現実になったんで呼び出した」
ステフ「懸案事項って」
鉄男「テレポート位置をテレポーテーションで修正するんですね」
マクニール「なんでそのことを」
鉄男「わかるんです
じゃあ、着陸船の操縦室に移動します」

○着陸船操縦室

マクニール「こちらのスタッフが、そのプログラムを組み立てた。

それは、補給船がドッキングするときの、昔の二重像合致式の視覚誘導なんだ。いまからモニターにそれを表示する」

モニターに進行方向の星空が。その上に、細い大きな赤い十字が、マーズ8号の先端に重なって表示され、さらに別の位置に緑の十字が。

鉄男「赤い十字を緑の十字に重ねるんですね」

マクニール「そうだ」

一回目、近くはなるが重ならない。

2回目、かえって下へ下がりすぎる。

3回目、両方がピタッと一致する。

マクニール「成功したね。こんなに簡単だとは思わなかった。ほんとに良かった。これから毎回テレポートした2時間後、地球と月の天文台からの新しい軌道計算に基づいて、姿勢コントロールをやって欲しい」

鉄男「わかりました」

○ホイール操縦室

鉄男がステーキを頬張っている。

ステフ「すごい食べっぷり」

キャリー「そのフライドポテト、私にも少し頂戴」

鉄男「ああ、はいどうぞ」

鉄男、皿を傾けてキャリーの皿に移す。

キャリーむしゃむしゃ食べる。

ステフ「あなたも元気ね」

キャリー「うん。おいしいよ。ママもどう？」

鉄男「あ、忘れてた。

キャリーにお土産があるんだ」

あわててまわりを見回す。

鉄男「あった！」

操作卓の下に隠れていたアルミケースを見つける。

それをテーブルに。

留め金を外し、蓋を開ける。

キャリー「うわあ！　なにこれ」

ステフ「スケッチブックにクレパスに、ノートにシャープペンシル、それから・・・。ボール」

ステフ「クレパスは有難いわ。もう無くなりかけてたの。スケッチブックも・・・3冊。ノートも3冊。ほんとにありがとう、テッッオ」

ジョン「こういうものは、持ち込みが制限されていたからな。まず食料に水優先だったから」

ステフ「タブレットの入力は指か音声で、手先の運動が不足してたの。手を使うことは人間にとって大事なことだから」

鉄男「さて、軌道修正に行ってきます」

〇ホイール操縦室（朝）

鉄男「キャリー、さっそく今日のお勉強を始

めてください。

ジョン、ルームAに行きましょう」

ジョン「なんかあるのか」

鉄男「ええ、あります」

二人は隣の部屋へ。

○ルームA

鉄男、白いボールを取り出して

鉄男「キャッチボールしましょう」

ジョン「おお、おお、これはビックリ。

宇宙船の中でキャッチボール！

よし、やろう」

鉄男、部屋の隅まで移動して、ボール

を投げる。

球はハイスピードでジョンの手元に。

ジョン、片手で球を受ける。

ジョン「おお、重力が低いから早いな。

柔らかいから怪我はしない。

これはいい」

と球を投げ返す。

鉄男も片手で球を受け。投げ返す。
ジョンも受けて放物線状に投げ返す。
鉄男「ジョン、お年寄りとは思えませんね」
ジョン「だれが年寄りだ。
馬鹿にするなよ」
こうして続けていると、隔壁が開いて
キャリーが入ってくる。
キャリー「うわあ、なにやってるの」
ジョン「キャッチボールさ。
君もやるかい」
キャリー「する、する」
鉄男「じゃあ、このボールを受け止めて。
あわてないでね」
と、ワンバウンドで投げる。
球は低重力で大きくバウンドしてキャ
リーの正面へ。
キャリー、両手で受けとめる。
ジョンと鉄男拍手。
ジョン「うまい、うまい」
鉄男「今度は私に投げて」

キャリー、思い切り投げる。
球は鉄男の左の方へ。
鉄男、ジャンプして受けとめる。
鉄男「次はジョンだ。
カーブで行くよ」
と、手首を捻りながら投げる。
ジョン、かろうじて受け止める。
そこへステフも入ってくる。
ステフ「ちょっと、なにこれ」
ジョン「君もやるかい」
ステフ「もちろんよ」
ジョン「よし、男対女の勝負だ」
と鉄男の傍までやって来る。
鉄男「えーっとね、キャリーとジョンは壁際へ。
椅子や机に当たると怪我するから」
ジョンとキャリー移動。
ジョン「行くぞ」
球はステフの懐へ。
彼女も片手で受けとめ、鉄男に返す。

鉄男「おお、豪速球だ。
さあ、キャリー、行くぞ」
やはりワンバウンドで投げる。
球は脇に逸れて、キャリー追いかける。
キャリー「テッツオ、ちゃんと投げないと怒るよ」
鉄男「おお、怖い。
わかった、わかった」
キャリー、ジョンに向かって投げる。
球は天井でワンバウンドして激しく床と天井を行き来する。
ジョン「おお、これは大変な変化球だ」
球を追いかけて転んでしまう。
鉄男、すぐそばに。
鉄男「ジョン、大丈夫？」
ジョン「ううっ、大丈夫だ」
ステフ「ちょっと見てみる」
とジョンの足に触る。
ステフ「ここ、痛くない？」
ジョン「大丈夫だ。

どこも痛くない」

鉄男「あなたの年齢では危険かも」

ジョン「おい、頼むから仲間外れにしないでくれ」

ステフ「さあ、立ってみて。どう？」

ジョン「ＯＫ！」

と飛び跳ねて見せる。

ジョン「だけど、もう疲れた」

鉄男「ええ、私も疲れた。今日はこのへんで」

４人は操縦室へ戻る。

○ホイール操縦室

戻ってきた４人は、水を飲む。

鉄男「姿勢制御（ポスチャーコントロール）の時間だ。着陸船へ行ってきます」

と、立ち上がり、スポークの入口へ。

Ｔ「２３日目」

○回転ホイール回廊（朝）

ジョンと鉄男、ステフとキャリーの先10mを歩いている。

ジョン「テッツオ、君は鈍いのかい？」

鉄男「え？」

ジョン「だからさ、ステフのことさ」

鉄男「彼女がどうかしましたか？」

ジョン「ああ、いらいらする。彼女の君への想いさ。わからないのか」

鉄男「想いって」

ジョン「だからさ、何でもないのに君の腕に手を掛けたり、頬を触ったり」

鉄男「ああ、あれは多分体温を測ってるんでしょ」

ジョン「いやはや、あきれ果てた男だね。あれは、君に恋しているサインなんだよ」

鉄男「たとえそうでも、彼女にはジェッシーという恋人がいます。

私の出る幕ではありません」

ジョン「君は生真面目な男だな。
まあそこが君の取柄（とりえ）なんだけどな」

T「41日目」

○着陸船操縦室

操縦席で、鉄男が大きな深呼吸。

ステフ「今日で118回のテレポーテーション。
それも一日3回。
ほんとに体が慣れてきたのね。
前みたいに倒れることもなくなったし」

鉄男「お陰様で」

T「48日目」

○着陸船操縦室（朝）

鉄男、操縦桿を握りしめ、モニターの
火星軌道を見つめる。
軌道のその先に、赤い芥子粒（けしつぶ）ほどの星

が光る。

ジョン「とうとう火星が見えてきた」

ステフ「それより困ったことがあるの」

ジョン「ヒューストンのことだろ？」

ステフ「そう、この7日間、連絡がないの。どんなに長くても2時間以内に連絡が取れるはずなのに」

鉄男「電波のレベルの低い通信の記録はあるでしょ」

リンカーン「有ります」

ジョン「ああ、そういうことか。わかった。直近の連絡を再生してくれ」

モニターに縞模様が次々と。

さらに雑音が。

ジョン「これは一体？やっぱりノイズか」

鉄男「画像を早送りしてください」

ジョン「早送り？」

ステフ「もしかしたら・・・」

ステフ、画像調整ダイヤルを回す。

ダイヤルが早送りになるにつれ、画像と音が正常に。

マクニール「こちらヒューストン。こちらヒューストン、聞こえますか？」

ステフ「あっ、」

リンカーン「続いて次の通信です」

マクニール「今日も聞こえてないのかな。でも送信しよう。

こちらヒューストン、聞いてくれ。

そちらは大変なことになっている。

君たちの８号が７号の真後ろにいる。

こんなに早く追いつくはずがないのに。

考えもしなかったことが起こってしまった。

専門家が言うことには、原因はテレポーテーションらしいということだ。

光は１秒間に３０万Ｋｍ進むが、君たちの船は、一瞬で３８万Ｋｍ進んだ。

それも何回も。

ということは、光よりも早い。

光よりも早く進むとき、どんなことが起きるかは、学者の間でもよく分かっていない。
でも今度のことで、８号の船内よりも外の世界は、時間がゆっくり進むらしいことが推測される。
そのため、まともな通信はできないのではないかと思われる。
７号は君たちより８０万Ｋｍ先にいる。
今からはマーズ７号との通信を許可する。
宇宙空間座標は、火星の東キャナル基地からもらってくれ。
東キャナルと通信できるか分からないけど、
ヒューストンとのやり取りでは急ぐ間に合わないから。
以上、健闘を祈る。
こちらヒューストン、通信終わり」
船内に静寂が流れる。
突然モニターが光る。

スティーブ・ランカスター（45）「マーズ8号、マーズ8号。こちらマーズ7号、マーズ7号。船長（コマンダー）のランカスターです。どうぞ」

音声にエコーが懸かり画面が脈打つ。

ジョン「あっ、来た！」

ステフ「マーズ7号、こちらマーズ8号のミランです。ついさっきヒューストンからの連絡をもらいました。追いついて良かったです」

ランカスター「ほんとによかった。あなたたちの努力に感謝します」

ステフ「そちらの状況はいかがですか。どうぞ」

ランカスター「連絡を手短にします。こちらはあなた方のすぐ前にいます。ただ、このままでは8号とランデブーすることはできません。進む方向と速度がずれているからです。

こちらの信号を頼りに迎えに来てもらえませんか」

ステフ「わかりました。
もうしばらく我慢して信号を発信し続けてください。
そちらの速度はどのくらいですか？」

ランカスター「1秒に22Kmです」

ジョン「こちらは1秒23Km。
そちらは加速を一時止めてください。
速度を揃えないと」

ステフ「ランカスターさん、しばらく待っていてください」

と、そのときランカスターの傍にいた男が画面に割り込んでくる。

ジェシー・ダグラス（35　ステフの元恋人）
「ステフ！」

ステフ「あっ、ジェシー！」

ランカスター「積もる話はあとで」

ステフ「ランカスターさん、こちらは至急加速して傍に行きます。

通信は後程」

T「50日目」

○2隻の宇宙船が並行して進んでいる宇宙
2隻はシューターの管で繋がっている。

○マーズ7号シューター前
宇宙服のヘルメットを脱いだ鉄男とランカスターとジェシー。

ランカスター「やりましたね、
全員8号へ移動完了です。ありがとう。
我々で最後です」

とそのとき電灯が明るく灯る。

鉄男「ああ、よかった」

ランカスター「突然消えて突然灯(とも)る。
一体何でしょう」

鉄男「分かりません。
ところで、今からこの7号のパラボラを回転させて、お尻を火星に向けて減速させよ

うと思います」

ランカスター「そんなことできるんですか」

鉄男「できます」

ランカスター「どうやって」

鉄男「テレポーテーションです」

ランカスター「え？」

鉄男「瞬間移動です。

わたしにはそれが出来ます」

ランカスター「ほんとうですか」

鉄男「本当です。

2か月で7号に追いついたのは、そのためです」

やってみませんか」

ランカスター「ああ、なるほど。

ちょっと信じられない話だけど・・・。

ええ、やりましょう」

鉄男「それじゃ、船長、マーズ8号へ移動してください。

船長（コマンダー）がいないのは困りますから」

8号に戻ったら、シューターをすぐ解除し

て、7号から離れて下さい。
そばにいると危険ですから」
ランカスター「じゃ、これで。
健闘を祈ります」
鉄男「ジェシー、帰ったらステフやジョンが
心配だと言ってここに来ようとしますが、
それを押しとどめてください。
やはり危険ですから」
ジェシー「わかった」

○7号着陸船操縦室

鉄男、操縦席に。
突然8号との通信回路が開く。
ステフ「テッツオ、なにやってるの！」
鉄男「ああ、ごめん。夢中になって連絡を
忘れていた」
ステフ「7号をターンさせるんですって？」
鉄男「そうなんだ」
ステフ「今からそこへ行きます」

ジェシー「ステフ、それは駄目だ。
テッッオの集中力が途切れる」
ステフ「ああ・・・しかたない。
テッッオ、気をつけるのよ」
鉄男「うん、ありがとう」
鉄男、通信スイッチを切る。
そして正面の大きいモニターに話しかける。
鉄男「オリン、はじめまして。
岡田鉄男と申します。
君の力が必要です。
どうぞ助けてください」
オリン「こちらこそ、どうぞよろしく。
何をするのですか？」
鉄男「7号のパラボラを火星に向けます。
それを手伝ってください」
オリン「はい」
T「65日目」

○マーズ8号ホイール操縦室

ランカスターとジェシーら6人、それから8号乗組員（クルー）4人が集まっている。
みんな中央のモニターに釘付けに。
そこには、火星上空のプラズマビーム発射砲の近くを通り過ぎる7号が。
ランカスター「やはりちょっとスピードが速すぎるようだけど、リンカーン、7号は火星に留まれるのか？」
リンカーン「データが少なすぎて判断できません」
ランカスター「そうか。
あとは祈るほかないな、さて、岡田さん、話というのは何かな」
鉄男「はい、今から重大な発表をします。
冷静にお聞きください。
実は、私は、このマーズ8号の旅は2回目です」
ステフ「2回目？
どういうこと？」

鉄男「地球から宇宙服で8号にテレポートして、7号救助を2回やったということです」

ジョン「訳がわからん。なんの話だ」

鉄男「かってジェシー、ステフ、キャリー、そしてジョンが、私の瞬間移動でフェリーボートで火星に着陸すると、時間の断層に入って、100年後の東キャナルに到着するのです」

ステフ「100年後・・・」

鉄男「その年にロシアの兵がマーズ51号に侵略しあと少しで火星という時に、乗組員2人が捕らえられ、一人は殺され、一人は女性故に辱めを受けました。

私は日本の古武道、小太刀の技で連中を撃退しました。

その時の傷が、この頬の傷と、ここ、背中の傷です」

と、ポロシャツをめくり上げて見せる。

ランカスター「むむ」

鉄男「さらに、中国基地の人々の危機を、東キャナルの人々と共に救いました。
そして最後に、月基地の人々の有志を、火星に避難させる作戦にも参加しました」
ジョン「いったい何年・・・」
鉄男「そこから、アメリカとイスラエルの兵の乗った巨大な宇宙船と戦い、その宇宙船を火星に着く直前に破壊しました。
その爆風で、私は100年前の地球に戻ったのです。
そうして2回目の7号救出作戦に参加して，今ここにこうしているのです」
不思議そうに話を聞いているキャリー。
ランカスター「聞けば聞くほど不思議な話だ。それで100年後の火星はどんなところだ」
鉄男「大気の成分は地球と少し違いますが、呼吸は出来ています」
ランカスター「住居は？
今、火星ではドームの中に貨物船を横たえ

てそこで寝起きしているが」

鉄男「戸建ての住まいが一般的です」

ジョン「食料は？」

鉄男「あなたの提案なさった方法で2万人の食事をまかなっています」

ジョン「そうか」

ランカスター「いや、そそられるなあ。この着陸船ごと100年跳ぶというのはどうだ」

鉄男「わかりませんが、たぶんできるでしょう。

しかし、今から降りるあなた方の努力があってこそ、東キャナル市は健全な都市になったのだと思います。

あなたがたがいなければ、それは成しえなかったと思います」

ランカスター「そうだ、そうだな。

私の要らざる望みだった」

鉄男「そこでジョンをはじめ、7号に乗り組んだあなた方にお聞きします。

今度も私と100年の旅に出られますか？
なんの法則が働いているのかわからない旅で、危険と言えば危険な旅ですが。
ちょうど100年後の火星に着地する保証はありません。
前回は、キャリーの体が着陸の荷重に耐えられないという前提で、一緒に乗り組みましだが」
ステフ「今でも、着陸船は3歳の子供は危険でしょう？」
ランカスター「あ、いや。
ひとつ特別な方法がある。
これは病人の為のシステムなんだが、今まで子供に使ったことはない」
ステフ「なんですか、それ」
ランカスター「水槽を用いた荷重低減装置だ。
水を張った水槽に、酸素呼吸器をつけて体を沈め、それで圧力を和らげるものだ。
火星着陸時には最大3～5Gの圧力がかかるが、これを使えば圧力は半分になる」

ジェシー「今まで何回使われましたか？」

ランカスター「1回だけだ。

そのときは無事着地した」

ステフ「ジェシー、どうする？

どちらを選ぶ？」

ジェシー「どちらと言われても・・・」

鉄男「まだ少し時間があります。

二人でよく相談して決めてください」

ジョン「テッッオ、君は？」

鉄男「私はぜひ逢いたい女性がいます。

イ・ソアさんといいます。

ですから私は何が何でも100年後に跳びたいです」

ジョン「そうか。

いや、私も君と一緒に行きたい。

どんな農業が行われているのか、ぜひ見たい」

鉄男「じゃ、そういうことで。

ランカスターさん、この話は7号の皆さんには決してお話にならないように御願い

します。

話せば動揺が起きるかもしれません。

8号は無事火星に着陸しましたから、その心配はいりません」

ランカスター「もちろんだとも」

○マーズ8号着陸船・移住者客席

操縦席に一番近い座席

鉄男「いよいよお別れだね」

ジェシー「いろいろありがとう。

もう逢えないなんて淋しい」

船内宇宙服のステフとキャリー。

ステフ「ほんとにありがとう。

胸がいっぱいで、なんにも言えないけど」

鉄男「なんにも言わなくていい。

気持ちは良く判ってるから。

キャリー、お別れだ。

ハグしよう」

二人はハグする。

鉄男「あ、そうだ、これお土産」

とポケットから白いボールを取り出しキャリーに持たせる。

ランカスター「そろそろ水槽の蓋を閉じるよ。二人とも水槽に入って」

二人が水槽に入ると水が注入される。キャリーが怖がって水槽から出ようとする。

ステフ「だいじょうぶよ、ママがついてるから」

と強く抱きしめて水中へ。

二人は横向きにぴったりからだを合わせる。

ジェシー「これでGが半分になるとはいえ、心配だなあ」

ランカスター「前、使った患者も無事火星に着陸できている。たった6分間だから心配ない」

鉄男「じゃあ私はホイールに降りる。さよなら」

ジェシー「さよなら」

そうしてジェシーは水槽の横の座席へ。

○着陸船の中の水槽のそば

着陸船は無事着陸。

ジェシーが水槽の水を排出するボタンを押す。

さらに水槽のロックを外し、蓋を開ける。

キャリー、大きな息をつく。

キャリー「ママ、怖かったよう」

ステフ「そうねほんとに」

ジェシー「（2人を抱きながら）よかった、無事で」

○8号のフェリーボート

フェリーボートに座っている鉄男とジョン。

鉄男「いよいよ出発ですね」

ジョン「リンカーン、最後の任務だ。フェリーボートを吐き出して」

リンカーン「はい、どうぞご無事で」

ジョン「ありがとう、リンカーン。

君は、30か月後に地球に帰るんだな」

リンカーン「はい。

また新しい着陸船を積んで戻ってきます」

鉄男「さようなら」

リンカーン「さようなら」

○マーズ8号・ホイール

船側から、6人乗りのフェリーボートが吐き出される。

フェリーボートは姿勢制御エンジンをふかして、機体を火星表面と平行に。

○フェリーボート内部

ジョン「フェリーボートは2機のマーズ号の連絡用だから、これで着陸というのは、無理があるように思うんだが」

鉄男「おっしゃっていることはよくわかりま

す。

このボートのメイン・エンジンはテレポーテーションです」

鉄男、ヘルメット内の３Ｄゴーグルをセットする。

見回すと、上は満点の星空。

下は荒涼とした火星の大地。

画像は右から左へとゆっくり動いてゆく。

しばらくして北半球赤道近くの、アマゾニス平原の東キャナルの特徴的な星形の構造物が。

鉄男「東キャナルが見えました。これから降ります」

何回か高度を変えながら瞬間移動を繰り替えして地表近くに。

○東キャナル基地の着陸場

フェリーボートが地上１０ｍのところで一瞬静止。

そして小刻みに高度を下げ、着陸。
途端に回りのすべてのものが波のように揺らぎ、光が明滅する。
そしてすべての光が消える。

○フェリーボート内部

鉄男「やっぱり」

ジョン「一体何が！」

ジョン、手探りで操縦席の前のパネルに触る。

2人の上から光が降り注ぐ。

鉄男「宇宙服の酸素を止めて」

ジョン「そうか。

その酸素は最後まで取っておくんだ」

二人ともヘルメットを取る。

ジョン「このフェリーボートの酸素は？」

鉄男「2人だから20時間前後」

ジョン「やはり固形物の食事は着陸してからか」

鉄男「この船にはトイレがないから」

ジョン「尿のために尿取りパッドを穿かせられたのはこのためか。
この先何が起きるのか・・・」
静かに重苦しい沈黙が。

T「17時間後」
鉄男「あ、明かりが！」
ジョン「明るい霧が・・・」
窓から見える外は霧に包まれたように。
次第に霧が晴れ始める。
前面の窓から、多くの建物が見える。
鉄男「よかった！」
外を見ると、1台のドローンが近づいてくるのが見える。
2人の男性が、宇宙服もつけずに降りてくる。
鉄男「宇宙服を脱ぎましょう」
ジョン「大丈夫か」
鉄男「あのお二人が宇宙服なしだから大丈夫です」

○火星の地上

鉄男とジョン、フェリーボートのドアを開き、タラップを踏んで、地上に降りる。

そして2人の男に近づく。

鉄男M「あ、ライアン、それにゴードン！」

鉄男「私は岡田鉄男といいます」

ジョン「ジョン・ダーウェルです。あなた方は？」

ホール「保安官のライアン・ホール（48）、こちらは危機管理のゴードン・ローリン（62）。あなた方は何者だ。何処から来た」

鉄男「私が分かりませんか」

ローリン「何を言ってるんだ。初対面でわかるわけないだろう」

鉄男「ああ、そうか、初対面か。あの、後程詳しく話します。

それより、今は地球歴何年ですか」

ゴードン「2146年だが、それが何か」

鉄男「たいへんだ。

あの、マーズ号2機が出発したのは、今から何日前ですか」

ゴードン「何日というより、5か月前だ」

鉄男「ああ、ほんとにたいへんだ。

53号に乗ったのは、イ・ソアさんじゃなかったですか」

ゴードン「そうだけど」

鉄男「ソアさんの命が危ない！」

ゴードン「何が危ないのかわからないけど」

鉄男「市庁舎に行きましょう」

鉄男たち4人はドローンに。

○東キャナル市庁舎・通信室

通信士イズマイル（33）がコンピューターの前で執務中。

そこへ4人が現れる。

鉄男「イズマイルさん！」

イズマイル「え？
あなた誰？
ホールさん、ローリンさん！」
鉄男「詳しく話している時間がない。
すみませんが、マーズ53号に連絡を取りたいんです」
イズマイル「なぜ？」
鉄男「それは連絡する話ですべてわかります。
一刻を争うんです。
お願いします」
イズマイル「ローリンさん、どうしますか」
ローリン「（しばらく考えて）やってみよう」
イズマイル、操作卓に手を触れる。
イズマイル「じゃあ、どうぞ。
と言っても53号に届くのは18分後、それから連絡が来るのはまた18分後」
鉄男「じゃ、話します。
イ・ソアさん、私は東キャナル・危機管理課の岡田鉄男と申します。
たぶん、今あなたがやろうとしているメン

テナンスで重大事故が起こります。
お仕事の中に、53号のすべての隔壁のチェックが含まれていると思いますが、その中で、医務室と着陸船を結ぶスポークの、医務室側の隔壁に故障が発生し、あなたがスポークに入った途端、隔壁が開かなくなります。
着陸船への隔壁も、なぜか着陸船側からロックが掛かり、あなたはスポークの中で寒さに晒され、死の可能性が高まります。
どうか、その点を注意してください。
通信終わります。
ご返事をお待ちします」

大きく息をつく鉄男。

イズマイル「ほんとですか、その話。
ほんとだとしたら、なぜあなたはそのことを知ってるんですか」

鉄男「すみません。
丸2日、まともな食事を摂っていません。
40分近く時間がありますから、食堂へ行

ってきます」

と言って立ち上がり、ジョンの手を取って部屋を出てゆく。

イズマイル「ちょっと岡田さん！」

○市庁舎食堂

親子丼を平らげ、お茶を飲む鉄男とジョン。

そこへシングルトン市長が。

鉄男「ああ、市長。

驚かせてすみません。

詳しい話をしますから、後で主だった人たちを市長室へ集めてもらえませんか。

私は通信室へ行きます」

○通信室

入ってくる鉄男。

イズマイル「岡田さん、通信が届いています」

鉄男「あ、そうですか。

早速見せてください」

イズマイル、再生ボタンを押す。

モニターにソアの姿。

ソア「岡田さん、連絡ありがとうございます。隔壁の件、早速調べてみます。のち程報告します。急ぎますのでこれで」

画面が暗転。

鉄男「また連絡が来たら、市長室へ知らせてください」

イズマイル「わかりました」

○市長室

鉄男「以上が、私とジョンが火星に来たわけです。話している私が信じられないので、皆さんに信じてくれというのも無理があります」

アルメンダリス「君は１００年を一跨ぎして、さらにもう二度１００年を超えたというのだね」

鉄男「そうです」

アルメンダリス「こんなことって、ほんとにありうるのか」

ホール「それと君の言っているロシア兵のマーズ号占拠というのは、実際起こっていない。

中国基地の救出劇も起っていない」

岡田「今のロシアの大統領は何という人ですか」

ローリン「シェレブリンという男だ」

鉄男「ドブゾロフではないんですね」

ローリン「そうだ、それがなにか」

鉄男「地球に帰った時、火星協会の人が、ドブゾロフの出世を邪魔すると言っていたのが成功したようです。

だから、ロシア兵のマーズ号占拠は起らず、中国も無事で、中国の火星基地も大丈夫と言う訳のようです」

アルメンダリス「遠く離れた一羽の蝶の羽ばたきが事件を起こすという、あれか」

鉄男「あの、イ・ソアさんと一緒にマーズ5
4号で出発した人はいますか。」
私がその役割だったんですけど」
ホール「それは、ソアさんの夫です」
鉄男「え？
ソアさんは離婚していたんじゃなかったで
すか？」
ホール「そうなのか？」
鉄男「はあ」
呆然と一点を見つめる鉄男。
鉄男M「なんということだ。
ここまで時空を超えてきたのに」
ゴードン「どうしたんだね、気が抜けたよう
な顔をして」
鉄男「いや、なんでもないです。
もう疲れました。
一寝入りしたいです」
ホール「そう、じゃあホテルに案内しよう」
鉄男とジョン、立ち上がり、ホールに
続く。

○ホテルの一室（夜）

鉄男とジョンが酒を飲んでいる。

ジョン「どうだ。一杯飲んだら気が晴れたか」

鉄男「いや、そう簡単には。

ステファニーさんにも、ソアさんにも夫がいて、ほんとにわたしは女性運が無いことを思い知らされました。

もう恋などしたくありません。

あきらめました」

ジョン「そう簡単にあきらめるもんじゃないよ。

世の中の半分は女性なんだから、いつかいい出会いがあると思うよ」

鉄男「そうでしょうか」

ジョン「そうだとも。

火星の人口は2万人いるそうだから。半分は女性だ」

鉄男「その理屈はおかしい。

だって、その中には幼児や老人もいる。

恋の対象にはならない」

ジョン「そりゃあそうだ。

20歳以下が40000人、50歳以上が30000人とすると、君の恋の対象は残り30000人。

どうだ、気分が良くなっただろう」

鉄男「それもおかしい。

だって、そのほとんどの人が結婚しているはず」

ジョン「ああ、そうか、そうだな。

じゃ君には希望は全くない」

鉄男「私を励ますんじゃなかったんですか。

それじゃ、地獄に突き落とすようなもの。

お願いしますよ」

ジョン「ああ、ごめん。

謝るよ」

鉄男「ああ、今夜は飲み明かしましょう」

○市庁舎通信室（朝）

鉄男入ってくる。

イズマイル「岡田さん、イさんから連絡が入っています」

鉄男「おお、そうですか。じゃ、早速」

イズマイルがボタンを押すとモニターにソアの姿が。

ソア「岡田さん、連絡が遅れました。あなたのおっしゃるとおり、隔壁のスプリングが壊れていました。なにげなく作業していたら、大変なことになっていました。ほんとに有難う。あなたは命の恩人です。火星に帰ったら改めてお礼に伺います。まずは報告まで」

と、画像は途切れる。

鉄男「もう一回連絡してもぃいですか」

イズマイル「ええ、どうぞ」

鉄男、ヘッドセットを頭にかけ、

鉄男「イさん、マーズ54号に乗っているの

はご主人だと聞いていますが、お互いの安全確認をもっと頻繁になさることをお勧めします。

ＡＩコンピュータがらみでもいいですから、必ず実施してください。

お忙しいでしょうから、返事は要りません。どうぞご無事で。

さようなら」

通信を終わり、大きく息をつく鉄男。

イズマイル「なんですか、そのため息」

鉄男「あ、いや、何でもないです。

それじゃこれで。

どうもありがとう」

○東キャナル市長室

テーブルには、シングルトン市長、ローリン危機管理官、それとリッチマン農業委員にジョンが座っている。

シングルトン「今日お呼び立てしたのは、以前から懸案となっていた農業ドームの地

盤沈下の件です。
地下の氷を溶かし続けて９０年近く。
火星の表層から５０ｃｍ以上沈下していて、それは現在も続いています。
１００年で５０ｃｍだから、今はたいしたことはないんですが。
湖の南東のほうに、新しいドーム群を建設中ですが、火星の土に含まれる過塩素酸塩除去がネックになっています」
ジョン「やはりイオン交換樹脂で？」
リッチマン「そうです。
過塩素酸塩専用のものです」
ジョン「地球からその樹脂のプラント導入には莫大なコストがかかったはず」
リッチマン「それもこれも火星協会のおかげです」
ジョン「火星移住の前段階で、ロボットによる農業土壌整備が行われてきましたが、何十年もかけて、じっくり遂行していたため、優良な農地が出来てきました。

しかし、人口が増えるにつれ、農地不足は重大な問題です」

リッチマン「そこで提案ですが、いままでのドームの土を、ごっそり新しいドームに移植するというのは、どうでしょうか」

ジョン「うん、それはいい考えだ。なによりも地球から持ってきた地中の微生物を新たに投入せずに済む」

リッチマン「ただこれにも問題があります。その大量の土をどうやって運ぶか。現在のインフラでは・・・」

ローリン「やはり鉄道だな。旧ドームから新ドームまでの路線を」

ジョン「時間とコストの問題だ。しかし、農地の品質を考えると、土壌移植が最もむいい方法だ。水素エンジンの機関車でやるといい。火星の重力の低いことがプラスに働く。そんなばかでかい機関車じゃなくても運べる」

シングルトン「鉄は火星では無尽蔵にある。これで決まりですね。なにか問題を思いつけば、すくリッチマンに報告を」

リッチマン「そうしてください」

そこへ一人の中年男性が入ってくる。

オマル・カーン（火星探査機専門家　４４）

「たいへん遅れました。すみません」

シングルトン「いえ、いいんですよ。みなさん、このオマル・カーンさんは地上型火星探査機の専門家でいらっしゃいます」

カーン「カーンと申します。小さいころから火星探査機に興味があり、火星に来るまでは、ＮＡＳＡの探査機設計に携わっていました。

東キャナル市が完成したころからは、探査機はほとんど作られなくなりました。しかし、無用と言う訳ではなく、直接地面

に接して探査できる能力は、捨てがたいものがあります。

そこで私はＮＡＳＡに提案して、今は動かなくなった探査機を東キャナルに寄贈していただくことになりました。

そこでこのプランに皆さんのご協力を賜りたいのです」

ローリン「危機管理官のローリンです。

その古い探査機を何に使うのですか」

カーン「火星の地表には鉄・アルミ・マグネシウム・カルシウム・チタンなどが豊富に存在し、今も精錬所では毎日金属材料が生産されています。

しかし、金、銀、銅・錫、ニッケル、バラジウムなどの希少金属はほとんど見つかっていません。

これらは、電子基板を作るのに不可欠な材料です。

現在の在庫は、地球から持ち込まれたもので、遠からず払底します。

その前になんとか自前で確保したいのです」

ローリン「なるほど。

そのとおりですな。

しかし、古い探査機はここから遥か遠くにあります。それをどうやって・・・。

ああ、なるほど。

あなたは岡田さんのことを知っているのですね」

カーン「ええ。それで今日ここに来たわけです」

カーン、一同を見回して鉄男を見つける。

カーン「あなたですね、岡田さんは」

鉄男「はい、私です」

カーン「どうですか、このプロジェクトにご協力願えませんか」

鉄男「いいですとも。

私でできることならなんでも」

カーン「これはありがたい。

早速明日からでもお願いします」

ローリン「よかったなあ、テッッオ。
君に仕事が出来て」
鉄男「はい、ここへきて一か月。
なんのお手伝いをしようか迷っていました」
シングルトン「ダーウェルさんは、土壌の移
植にご協力願えますか」
ジョン「もちろん」
シングルトン「では今日の会合はここまで」

○火星探査車格納庫
大きな扉が開いて、カーンと鉄男が入
ってくる。
鉄男「思ったより狭いですね」
カーン「ご存じかと思いますが、1997年
から今日2147年まで打ち上げられた
火星探査車は、そんなに多くない。
特にマーズ号が火星を目指してからは、ま
ったく無くなった。
だから、これでも広い方です」
鉄男「まだ一台も回収で来ていないんですね」

カーン「そう。

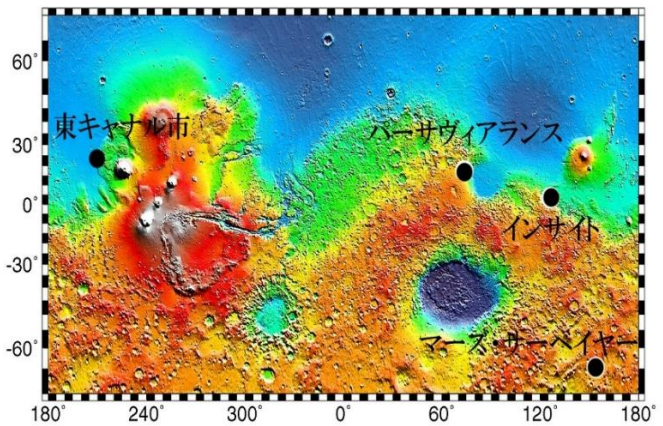
なにしろここから遥か遠くの場所に降りたから、回収の方法がなかった。

でも、あなたが火星に来てから、望みが湧いてきた。

早速まずパーサヴィアランスを回収しようと思います」

鉄男「それはどこにあるんですか」

カーン、1枚の地図を取り出す。



カーン「もう火星の裏側と言ってもいい遠く

です。

どうですか、やれそうですか」

鉄男「大きさはどのくらいあるんですか」

カーン「ちょうど地球の普通車くらいで、重さも1トン」

鉄男「手順は」

カーン「私とあなたで、2人乗りのドローンで出発して、一瞬で現地へ。

そこでパーサヴィアランスを探します。

多分126年経っていますから、砂嵐で、砂に埋もれていることでしょう。

それを上空から金属探知機で探します。

捜せたら、あなた一人で機体をここまで運びます。

運び終えたら、私の待っているところへ戻って、一緒にここへ戻ります」

どうでしょう、やれますかね」

鉄男「多分大丈夫でしょう」

カーン「じゃあ、市長に報告して準備しましょう」

○東キャナル宇宙空港

カーンと鉄男が歩いてドローンまで。

ローリンが手を振って見送る。

やがてドローンは上空へ。

ホバリングし始める。

○ドローンの中

操縦席の正面窓にモニターがオーバーレイされている。。

そこには火星地図が。

カーン「座標を入力。

北緯18・43、東経77・58」

地図に赤い○が。

地図の真上に赤丸が来るように、ドローンを回転させる。

カーン「さあ、ここから君の出番だ」

鉄男「はい」

鉄男、オリンポス山の左方向に瞳をこらす。

次の瞬間、ドローンはオリンポスをかすめて西へ。

レイヤーの東経が0付近に。

カーン「一瞬に半分まで来た。

現地を見なくてもテレポートできるのか」

鉄男「北緯は東キャナルとほぼ同じ。

あとは距離感に頼っています」

カーン「ほう」

鉄男「ではもう一度」

前方を見つめる鉄男。

そして広大な高原の上に現れる。

カーン「クサンテ高原とある。

もう少し右だな」

ドローンは少し赤道よりに移動。

カーン「うん、ここいら当たりがジェネロ・クレーターだな。

ここからはドローンで移動する。

金属探知機の出番だ」

モニターは真下の火星地面を写し、細かい格子レイヤーが描かれる。

カーン「ここからは忍耐力勝負だ」

ドローンはその格子一つ一つを舐めるように飛行。

検知器の照準が、通り過ぎるたびにセルの色が変わる。

鉄男「もう一時間飛んでますが、ヒットしませんね」

カーン「まだまだ」

と、次の瞬間、ビーという音とともに一つのセルが緑に。

カーン「ここだ」

ドローンは真下に降下。

カーン「船内宇宙服を」

鉄男「えっ？

酸素はあるのに」

カーン「砂嵐の砂は、有毒物質をふくんでいるから」

鉄男「ああ、そうなんですか」

○ジェネロ・クレーターの中

ドローンから二人が降りてくる。

あたりを見回す二人。

その内に、200mほど先に、こんもりと盛り上がった砂山を見つける。

駆け寄る二人。

コール、砂をかき分け、先端にカメラのついたアームを見つける。

コール「あった、あったぞ」

鉄男「掘り出しますか」

コール「うん。

まず、6個ある車輪のうち、左側の3個をさがそう」

二人でカメラの支持棒の左側を両手でかき出す。

そのうちに、車輪3個を探し当てる。

コール「その車輪2個を支えているアームを持って、前に車体を引き出せますか」

鉄男「やってみましょう」

鉄男、砂の中に宇宙服の手を突っ込み、

2個の車輪を見つける。

鉄男「はて、どこを持てば安全に引き上げられるのか」

コール「その車輪の根元にシャーシーがあるはず。

そこを持って引き上げるといい」

鉄男「やけに細いですけど壊れませんか」

コール「車輪の部分は一番頑丈だから」

鉄男、それを持って引き上げる。

鉄男「ビクともしません」

コール「パーサヴィアランスは1トンあるから、火星上では380kgぐらい。

でも人間の手では持ちあげられない。

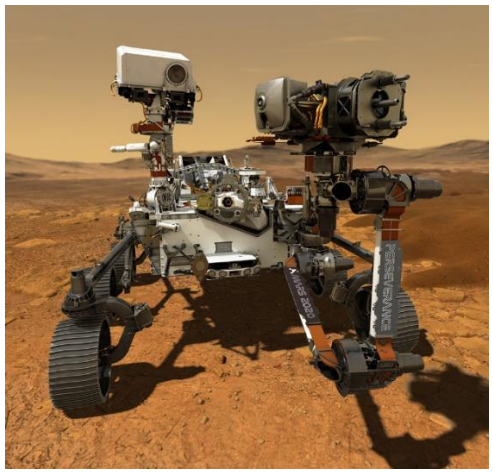
だから君の出番だ」

鉄男「ああ、そうか。

そうでしたよね」

鉄男、3m先の地面を見つめる。

そしてその場所に探査機を移動させる。



コール「まだ砂がのっかっている。
もう一度テレポート」

鉄男、再び探査機と共に移動。
さらに多くの砂が流れ落ちる。

コール「もうその位でいい」

コール、ドローンから肩掛け式のブロアを引き出す。
スイッチを入れて、優しく細かい砂を吹き飛ばしてゆく。
しばらくして

コール「岡田君、代わってくれないか。
疲れた」

鉄男「はい」

こうして彼も砂を取り除いてゆく。

コール「もういいだろう。
次は私の体に着いた砂を吹き飛ばしてくれ」

鉄男、ブロアを弱にしてコールの体に
風を送る。

コール「次は君の体だ」

コール、鉄男の体の砂も取り除く。

コール「じゃあ、探査機を東キャナルまで
テレポートしてくれないか。
終わったら迎えに来てくれ」

鉄男「はい」

プロアをコールに渡して、探査機の
脚部を掴み、次の瞬間消える。

残ったコール、ブロアをドローンに
格納し、探査機の埋まっていたところ
を調査。

コール「なにも残っていない」

そのとき鉄男が帰ってくる。

コール「さあ帰ろう」

○東キャナル・探査機格納庫前

ドローンが現れる。

降りてくるコールと鉄男。

すでに探査車はそこにある・

コール「探査機を洗おう」

入口の水道ホースを取り上げ、優しい水流で探査機を洗い始める。

鉄男「コールさん、探査機が濡れてしまいますよ。

大丈夫ですか」

コール「探査機は防水・防塵だから」

鉄男「ああ、そうなんですか」

小一時間二人で機体を洗い、次にはお互いの宇宙服も水で洗う。

鉄男「あのー。今気が付きましたが、この探査車、太陽光パネルがないですね。

壊れて無くなったんですか」

コール「いいや、最初から無い。

実はこれの動力は原子力だ」

鉄男「ええっ、嘘でしょう」

コール「本当だ。
小さな水酸化プルトニウムの崩壊熱で発電して動いていた」
鉄男「じゃ今でも放射能を」
コール「いや寿命はたったの14年。
もう安全だ。
さあ、もういいだろう。
ランチだ」
二人は格納庫の中に入る。

○探査機格納庫
二人が野菜を巻いたパンとコーヒーで昼食中。
鉄男「金や銀はどんなところで採れるんですか」
コール「主に火山活動によることが多い。
だから、このオリンポス山、アスクレウス山、アルシア山、パポニス山と火山跡が集まっているこの地区は、多分たくさん埋まっているんじゃないかと思われる」

鉄男「へえ。
じゃ一番都合がいいですね」
コール「まあ掘り出すのは簡単じゃないけどね。
さあ、パーサヴィアランスを取り入れよう」

○格納庫前

鉄男「あれ、もう乾いてる」
コール「火星は極端に湿度が低いからすぐ乾く。
温暖化や湖が出来てから、少しは湿度も上がってるけどね。
さあ、車輪が大丈夫か試しに押して中へ入れよう」

大きく開いた扉に向かって、二人で探査車を押す。
探査車はゆっくりと格納庫の中へ。
コール「なんかゴリゴリ音がする。
連結部分の不具合か」
鉄男「大丈夫ですか」

コール「探査車の事ならなんでも手当てできる。
心配はいらない」

そのとき、鉄男の携帯電話が鳴る。

鉄男「ああ、ジョン、何ですか」

ジョン「急いで家に帰って来てくれ。お客さんだ」

鉄男「え、誰ですか」

ジョン「帰ってのお楽しみだ。じゃあな」

携帯電話を切り

鉄男「コールさん、急ぎの用事ができました。これで失礼します」

コール「ああ、そうか。今日はほんとに有難う。まさか火星の裏側の探査車を持ってこられるとは思ってもいなかった。また、頼むよ」

鉄男「はい、じゃあこれで」

と鉄男の姿は消える。

○陸上競技場そばのジョンと鉄男の家の前

鉄男、突然現れる。

急いで家の中へ。

○家の中の居間

部屋に入ってくる鉄男。

テーブルの前に座っているイ・ソア（32）を見て驚く。

鉄男「ソアさん！」

ソア「あ、岡田さん！」

驚く二人。

しばらく声も無く見つめ合う二人。

ジョン「何を驚いてるんだ。

テッッオ、まあ掛けなさい」

鉄男「ああ、はい」

鉄男椅子に座る。

ソア「先頃は助けていただいてありがとうございました」

鉄男「いや、なに、その」

ソア「それからダーウェルさんから、200年前にも助けていただいた話を聞きました。

俄かには信じがたいのですが・・・」

鉄男「そのことは忘れてください。

何よりも無事火星に戻られて良かった。

どうかこれからは火星で夫婦二人で静かな日常を過ごされますように」

ソア「え、夫婦？」

鉄男「マーズ54号に乗って共に月を目指したご主人」

ソア「ああ、あの人。

あの人は地球に帰りました」

鉄男「ええ？」

ソア「私たち二人はともにメカニックでマーズ号の保守管理をしていました。

ある日突然離婚を言い出されてしまいました。

口喧嘩が嫌で、詳しく訳も聞かずに別れま

した。

二人で過ごす時間が極端に少ないせいだと思っていましたが、月に着いたその日に、彼は自分がゲイであることを告白しました。とても私と暮らしていけないと。

そして彼は、地球に向かうムーンライナー号に乗って、地球に帰りました。

私は悔しいやら、腹立たしいやらで、眠れぬ夜を過ごしました」

鉄男「なんとまあ。

そんなことがあったんですか」

ジョン「まあそれは済んだこととして忘れることですな」

ソア「私もそう思っています」

ジョン「しかし火星移住審査では、同性愛者ははじかれるはずだったが・・・」

ソア「そこが電算機と人間の違いでしょうね。

人間は複雑なんだと思います」

鉄男「それであなたは今どんな仕事を」

ソア「金属精錬所の機械のメンテナンスをし

ています。

もうマーズ号母船は古くて使用禁止となりましたから」

鉄男「ああ、なるほど。

それは残念ですね。

わたしもなにか淋しい気持ちがします」

ソア「あ、今夜マーズ33号・34号の移住者歓迎パーティーが開かれるのでした。

忘れてました。

どうです、一緒に行きませんか」

鉄男「でも、招待状が・・・」

ジョン「ああ、届いているよ、ほら」

ジョンが自分の携帯電話の着信履歴を開き、昨日の分を見せる。

鉄男「あ、ほんとだ。

じゃあ私のも」

やはり携帯電話を開く。

鉄男「地上探査車に夢中で気が付かなかった」

ジョン「行くか」

鉄男「行きましょう。

その前に着替えてきます。

汗びっしょりですから」

ソア「ええ」

○セントラルホテル・食堂（夜）

ソアとジョンと鉄男が入ってくる。

受付で携帯電話でチェックを受ける。

会場には150人以上の人々が。

ジョンの足がもつれる。

咄嗟に鉄男が支える。

鉄男「ジョン、今日はどんな農作業を」

ジョン「農作業じゃない。

新しく建設するドーム群の現地調査だ」

鉄男「あなたはやり始めると、とことんやるから、体か持たない。

頼むから無理しないように」

ジョン「わかったわかった」

鉄男「今日は立食パーティーだな。

ジョン、壁の椅子に掛けましょう」

そういって、腕を取って導く。

椅子に掛けたジョンは大きなため息。

鉄男「飲み物を持ってきます。
ソアさんも横に掛けて」

言うなり配膳コーナーへ。
しばらくしてトレーにビールのアルミ缶とスプーン付きのポテトサラダの皿を3っつ。

鉄男「さあ、どうぞ」

ジョン「こりゃあ有難い」

といいながら缶のプルトップを引っ張って、ゴクリと一口。

ソアと鉄男も飲む。

鉄男「ほんとに生き返るね」

ジョン「このサラダもうまい。
イモにニンジン、タマネギに卵のマヨネーズ、塩味がちょうどいい」

ソア「ほんとね」

そのとき、一人の男性がソアに声を掛ける。

男「イさんじゃないか。もう今日は来ないの

かと思ったよ。
ずいぶん捜したよ」
鉄男「ああ、すみません。
たいへん引き留めてしまって。
ソアさん、どうぞお仲間と話をしてきてください」
ソア「あ、あの」
鉄男「いいんですよ、遠慮しないで」
ソア「じゃあ、ちょっと」
と男と共に人々の群れの中に。
そのとき一段高いステージに来栖（くるす）さくら（28）と妹の来栖あやめ（25）と司会者が登壇。
司会者「それではお待たせしました。
来栖姉妹による合唱です。
曲は日本の古謡（波浮の港）です。
では、どうぞ」
二人が短調の旋律ををハーモナイズして歌いだす。

磯の鵜の鳥りや　日暮れにゃ帰る
波浮の港にゃ　夕焼け小焼け
明日の日よりは　ヤレホンニサ　凪(なぎ)るやら

船もせかれりゃ　出船の仕度
島の娘たちゃ　御神火(ごじんか)ぐらし
なじょな心で　ヤレホンニサ　いるのやら

風は夕風　御神火おろし
島の娘たちゃ　出船のときにゃ
船のとも綱　ヤレホンニサ　泣いて解く

ア・カペラで切々と歌い上げるその声に、鉄男また泣き出してしまう。
歌が終わり拍手喝采。
ジョンが肩を添えて鉄男の背を優しくなでる。
その鉄男に姉妹が気づき、壇を降りて近寄ってくる。

さくら「まあ、おじいさん！」

あやめ「おじいさん！」

鉄男「あやめにさくら！

よく無事でやってきたなぁ。

こんなうれしいことはない」

またひとしきり泣く。

ジョンももらい泣き。

鉄男「ところで私が親類だとどうして知っている」

さくら「ＪＡＸＡの人が教えてくれました。

ほら」

とポケットから１枚の写真。

そこには２０３７年の鉄男の姿が。

あやめ「おじいさん、全然年を取らないのね。

髪は白いけど」

鉄男「いや、実際の年齢は１１０歳だ。

いろいろあってね」

そのときジョンが

ジョン「悪いけど今日はもう帰らせてもらう。

疲れてしまった」

鉄男「ああ、やっぱり。
じゃあ帰りましょう。
ちょっと待ってね」
トレイにビール缶などを残らず乗せて、
配膳コーナーへ返す。
鉄男「ごちそうさまでした。
美味しかったです」
係りの男がにこやかに頷く。
鉄男、ジョンの元に帰る。
鉄男「さくらさん、あやめさん、また今度会
いましょう」
さくら「あの、おじいさんの家へこれから行
ってもいいかしら」
鉄男「今どこに泊ってるの」
さくら「陸上競技場の宿泊施設。
住所が決まるまでそこに」
鉄男「あ、そうか。
じゃあ僕らの家で暮らしなよ。
場所も競技場のそばだから」
さくら「え、いいの」

鉄男「いいさ、親類だもの」

さくら「そうね、あやめちゃん、どうする？」

あやめ「もちろんいいわ」

さくら「じゃ、おじいさん、お願いします」

鉄男「あの、おじいさんというのはどうもね。鉄ちゃんって呼んで」

あやめ「うん、わかった」

○ジョンと鉄男の家（夜）

ジョンと鉄男と、さくらと、あやめと、が部屋に入ってくる。

鉄男「ジョン、もう疲れただろうから、シャワーを浴びて寝たら？」

ジョン「おお、そうさせてもらう」

と言ってシャワールームへ。

鉄男「さあ、みんな座って」

全員椅子へ。

あやめ「鉄ちゃん、あの、どうして１００年も生きられたの」

鉄男「うん。

ほんとうのところ良くわからない。
テレポーテーションが原因だってことは、
確実だけど。
それに１００年ではなく、３００年もジャンプしてしまったんだ」
幸子「それはどういうこと？」
鉄男「それはこういう訳だ」
鉄男、冷蔵庫からソーダ水を取り出しみんなのコップに注いで話し始める。
コップのソーダ水がなくなるころ、話が終わる。
幸子「まるでＳＦ小説みたい。
普通ならホラ話しでかたずけられるけど。
やっぱりその頬の傷ね」
さくら「それと６世代後の私たち姉妹に、ここにこうして逢っていること」
鉄男「私の姉が住んでいたあの家は今も地球にあるのかなあ」
さくら「ええ、リフォームされたけどあるわ」

鉄男「私のことなど知っている人は居ないよね」

あやめ「それがそうじゃないの。2037年当時、JAXAの理事だった人が、鉄ちゃんの家系を事細かく記録していて、それが歴代の理事に引き継がれて、それのコピーをずっと紗枝さんの家に渡し続けていたの。だから、一門の人はみんなあなたのことを知っているわ」

鉄男「ほう、それは・・・。家に帰りたくならない？」

さくら「それはあるけど、こわい男の人たちがつけてくるあの生活はごめんだわ」

鉄男「お父さん、お母さんの気持ちは・・・」

二人の姉妹の眼に涙。

鉄男「ごめん、思い出させて」

あやめ「いいの。鉄ちゃんが親代わりよ」

鉄男「そうだな。

さあ、君たちもシャワーして寝たほうがいい。

寝室はあの右側の部屋。

シングルベッドが2つあるから。

ああ、下着がないな」

さくら「あした、競技場の火星生活ガイダンスで下着も日用品も配ってくれるって」

鉄男「それはよかった。

お腹が減ってたら、冷蔵庫になんでもあるから、自由に食べなさい。

じゃおやすみ」

鉄男立って、シャワー室から出てきたジョンと、二人の寝室へ。

○同・居間（朝）

鉄男、バジャマ姿で現れる。

部屋には姉妹が食事の仕度。

テーブルには、トーストと野菜サラダと卵焼きとコーヒー。

鉄男「やあ、お早う。

ああ、食事の準備までさせちゃつて。
ごめんね」
あやめ「鉄ちゃん昨日疲れてたから起こさな
かったの」
さくら「ジョンはまだ寝てるの？」
鉄男「うん。
よく寝てたから起こさなかった」
さくら「移住者ガイダンスに行く時間なの。
後かたずけお願いね」
鉄男「うん。
あ、二人の携帯電話番号をこれにコピー
しといてね」
さくら、鉄男の電話を受け取り、二人
で操作。
さくら、あやめ「行ってきます」
鉄男「行ってらっしゃい」
二人は出てゆく。
鉄男、椅子に座ってまずコーヒー。
それから食事を始める。

○鉄男とジョンの寝室（朝）

鉄男入ってくる。

鉄男「ジョン、もう起きないと」

鉄男。ジョンの方に手を置いて揺する。

鉄男「ん？」

鉄男、布団をはぐる。

ジョンの顔色が青い。

鉄男「ジョン、ジョン」

鉄男、ジョンの顔に触る。

鉄男「冷たい！」。

こりゃ大変だ！」

鉄男、首の下と膝に腕を差し入れ、

そのままテレポート。

○東キャナル中央病院

一階受付前にパジャマ姿の鉄男現れる。

驚く受付の看護師。

鉄男「すみません。

なんか様子がおかしいんです」

看護師、ジョンの体に触る。

看護師「このベッドに乗せてください」

看護師。受付の緊急ボタンを押す。

すぐ2人の看護師が駆け付け、ベッドを押して、診察室へ。

後を追いかける鉄男。

○同・診察室前

椅子に座って待つ鉄男。

医師が出てくる。

医師「あの、お気の毒ですが、お亡くなりになっています」

鉄男「原因は？」

医師「自然死ですね。ご高齢ですから」

鉄男、その場にへたりこむ。

○東キャナル墓地

50人程の人が小さな墓標の前に佇む。

鉄男「皆さん、今日はジョン・ダーウェルの見送りにご参列頂き、ありがとうございます。

彼はアイルランド人、私は日本人と、人種は違いますが、私は彼を本当の父と思っています。

彼の優しさは奥深く、いつも私を励ましてくれました。

今後どうやって生きて行けばいいのか・・」

鉄男、涙に声を詰まらせ立ち尽くす。

○東キャナル市長室

いつもの面々、シングルトン市長、アルメンダリス学長、ローリン危機管理官、コートニー議長、リッチマン農業委員が、静かに酒を傾ける。

シングルトン「岡田さん、気落ちしないでね。あなたには私たちがついてるから」

リッチマン「そうですよ。

ジョンも必要不可欠な人だったけど、いくら嘆いても生き返るわけじゃない。

一緒に火星を盛り立てて行きましょう」

鉄男「ほんとに有難う。有難う」

アルメンダリス「こんなときになんだけど、
3年後にたいへんなことが火星に起こる」
鉄男「なんですか、突然」
アルメンダリス「話していいのか、こんな時
に」
鉄男「もちろん。
私がここにこうしているのはそのためです」
アルメンダリス「そうか、わかってくれるか。
実は、3年後に（シニスター）という小惑
星が、この火星の近くに飛んでくるんだ。
激突するか、通り過ぎるかまだ分からない
が、前もって準備しておかねば」
シングルトン「それは大ごとだ。
なぜ早く教えてくれなかったの？」
アルメンダリス「いや、私も今朝知ったんだ」
シングルトン「地球からの連絡？」
アルメンダリス「いや、月の天文台からだ」
ローリン「そのシニスターという星は一体な
んなんだ」
アルメンダリス「ずいぶん前に、火星と木星

のメインベルトという小惑星帯からはじき出された星で、直径１１ｋｍの岩石惑星だ。

これがその模式図だ」

壁のモニターに木星、火星とメインベルトが表示される。

アルメンダリス「この水平面で表示されているのが黄道で、シニスターはこの面を飛び出て斜めの軌道で公転している。

宇宙はたいへん希薄で、星同士がぶつかるというのは稀です。

しかし、研究者によると、３年後にそれが火星で起こるかもしれないということだ」

鉄男「確実にぶつかるのですか」

アルメンダリス「いや、１００％ぶつかるとは言えないが、可能性は高い」

鉄男「ぶつからないこともあるんですね」

アルメンダリス「うん。

それはその時の木星の影響次第だ。

だけどそばを通り過ぎるだけでも大変なことになる。

シニスターは現在秒速18kmで動いている。

この重い小惑星がこの速度で、例えば火星上空100kmを通り過ぎると、すさまじい衝撃波が火星全土に襲い掛かる。

この衝撃波が地上に達する頃にはかなり弱まっているが、実際にどのくらいの被害がでるかはわからない。

それにも増して恐ろしいのは、火星上空の大気が剥ぎ取られることだ。

上空には、われわれが放った温室効果ガスのメタンと、もともとある二酸化炭素が、酸素とともにあるが、それが大量に剥ぎ取られると、火星がまた冷えてくる。

呼吸にも支障が出るかもしれない」

鉄男「どのくらい剥ぎ取られますか」

アルメンダリス「わからない。

シニスターの軌道が定まらないと計算もできない」

リッチマン「その衝撃波は地上の土まで宇宙

に運び去ることは」

アルメンダリス「上空100kmがもっと低いと大いにありうる。そのときは、舞い上がった砂ぼこりが火星全土に広がり、空は暗くなり、日照量も少なくなる。火星の重力は低いから、それが長く続く」

室内は静けさに包まれ、ためいきが漏れる。

シングルトン「あまりの報告にショックを受けて、考えがまとまらないわ。一晩考えて、明日また集まりましょう」

リッチマン「最後に、ダーウェルさんの冥福を祈って、乾杯しましょう」

ローリン「そうだな。今日はそのために集まったんだから」

リッチマン「じゃあ、ダーウェルさん、どうぞ安らかに！　乾杯！」

それぞれグラスを傾ける。

シングルトン「あ、シニスターの話は、他の

誰にも言ってはいけません。
たいへんな混乱を招くかもしれないから」

○鉄男の家の居間

鉄男、戸を開けて入ってくる。
さくらとあやめが調理中。

さくら「お帰りなさい。

鉄ちゃん、あの埋葬の後どこへいったの」

鉄男「ああ、市長に呼ばれて市庁舎へ」

さくら「こんな日に仕事の話？」

鉄男「市民生活は待ったなし。
仕方ないよ」

あやめ「そりゃあそうよ、お姉ちゃん」

さくら「そうよね。

ああ、あと少しで晩御飯よ」

鉄男「うん」

と、そのとき玄関のベルが。

鉄男「ああ、私が出るから」

玄関の戸を開けるとソアが。

ソア「こんばんは。

ああ、いい匂いね。

こんなときにお邪魔してすみません」

さくら「よかったら一緒に食べません？」

ソア「それはあんまり厚かましくて」

あやめ「いいんですよ。

量はたくさんあるから」

鉄男「イ・ソアさんはメカニックの仕事をしている。

この二人は、私の六代後の子孫のさくらとあやめ姉妹です」

ソア「何です？　六代後って」

鉄男「それは食事しながらでも話します。

どうぞ手を洗って来て」

ソア「じゃ失礼して」

立って洗面台に。

その間にチキンライスの皿が4枚。

他にコンソメスープのカップも。

4人が食卓に着き、

鉄男「頂きます」

ほかの3人も唱和。

ソア「あら、おいしい」
鉄男「うん、おいしい。
　これでいつでも結婚できるな」
さくら「いやだ、鉄ちゃん。
　あの、ソアさん、あなた結婚してるの？」
ソア「いいえ、今は独身」
あやめ「あら、いいじゃないの、ちょうど」
さくら「なにが？」
あやめ「鉄ちゃんのお嫁さん」
　あわてる鉄男。
鉄男「おいおい、失礼じゃないか」
あやめ「なにが？」
鉄男「初めて会う人に、そんなことを」
あやめ「何言ってんの。
　はやく結婚しなきゃ売れ残っちゃうわよ」
鉄男「人を芋か玉ねぎみたいに言うなよ」
ソア「それから言うと、私も売れ残り」
鉄男「ソアさんまで」
さくら「さあ、お皿を洗って、部屋でテレビ見るわよ。

今日は歌謡番組があるから」

あやめ「そうそう、こんなことしてらんない」

二人は食器をシンクに運び洗う。

ソア「私も手伝います」

さくら「というほどお皿がない。

ほらもう終った。

どうぞゆっくりして行ってね・

鉄ちゃん、おやすみ」

二人は自分たちの部屋へ。

残された鉄男とソア。

鉄男「いゃあどうも」

ソア「マーズ号でのこと、ほんとにありがとうございました。

知らずにスポークに入っていたらと思うとゾッとします。

お礼を言っても言い切れません」

鉄男「そんなの、気にしないでください」

ソア「でも。何故あのスポークが危険だと気付いたんですか」

鉄男「ああ、それはね、私には予知能力があ

るんですよ」

ソア「でもおかしいでしょ。

何百万キロも離れた私のことが・・・」

鉄男「それは」

ソア「ごめんなさい。

お手洗いどこかしら」

鉄男「あの奥の突当りです」

ソア「じゃ、ちょっと失礼して」

立ち上がり廊下の突き当りへ。

鉄男、両手で顔をこする。

鉄男「おお、危ない、危ない」

○お手洗いの外（夜）

ソア、ドアを開けて出てくる。

居間に行きかけて、左の半開きのドアに気づく。

好奇心で部屋の中へ。

○鉄男の部屋（夜）

そっと入ってくるソア。

部屋の隅の鉄男のデスクに近づく。
机の上のコンピュータに手を触れてみる。
するとスリープからコンピューターが起動。
そしてデスクトップ画面が表示される。
その背景画像が、ソアと鉄男が肩を組んでいる写真が。
ソア「え？」
そのとき鉄男が部屋の中に。
鉄男「あっ！」
ソア「あの、これってどういうこと？
私たち、以前に逢っていたの？
私、覚えが無いけど」
鉄男「うーん、参ったな」
ソア「ほんとに、どういうことなの？」
鉄男「うーん、困ったな」
ソア「困ってないで説明してよ」
鉄男頭を抱えて、そばのベッドに座る。

しばらくして口を開く・

鉄男「話してもいいけど、怒らないでね」

ソア「なぜ私が怒るの」

鉄男「わからないだろうな。

まあいい。

その前に言っておくことがある。

私は瞬間移動ができるんだ」

ソア「えっ」

鉄男「2143年、月の住民を助けるため、マーズ54号に乗って、君のマーズ53号と一緒に出発した」

ソア「そんなはずないでしょう。

54号には私の元夫が」

鉄男「そこなんだ。

今私たちがいるこの世界は、前に私たちがいた世界とは違うんだ」

ソア「それはそれとして、なぜ私が怒るの」

鉄男「ある些細なことで口げんかして、丸1日君とは連絡を取らなかった。

2日目にさすがに心配になって、53号の

コンビューターに君の所在を聞いたが、わからなかった。

そこで53号にテレポートして、やっとのことで、スポークに閉じ込められている君を見つけた。

ここからが犯罪行為の核心部分だが、極度の低体温症の君を助けるため、失禁して濡れた君のスラックス、アンダーパンツ、シューツを脱がせて、タオルで尿をふき取り、新しい服を着せた。

その間君の体を見てはいけないと思い、私はタオルで目隠ししていた。

目隠ししていたとはいえ、君の同意を得ずに下半身を裸にしたことは、今でもまずいと思ってる。

いまだに思い出しては反省してるが・・・」

鉄男、立ち上がって、頭を深く下げる。

同時にソアも立ち上がり、鉄男の前へ。

鉄男、張り飛ばされるかと思い、目を固く閉じる。

ところが、ソアは鉄男の体に抱き着く。

鉄男「えっ？」

ソア「ありがとう。

その話嘘だとしても、なんかうれしい」

鉄男「えっ、許してくれるの」

ソア「マーズ53号であなたから危険通報があった時、なぜかあなたが他人の様な気がしなかった。

今教えてくれたことは知らなかったけど」

鉄男「ソアさん」

二人は抱きしめ合ったまま立ち尽くす。

〇東キャナル市長舎外観（朝）

〇市長室（朝）

昨日の面々が椅子に座っている。

そこへ鉄男が飛び込んで来る。

鉄男「おはようございます。

遅れてすみません」

シングルトン「おはよう。

なんかうれしそうね。

なんかあったの？」

鉄男「いえ、なにも」

という間も、ニヤニヤ笑いが止まらない。

シングルトン「おかしな人ねえ。ま、それはそれとして、早速ですけど、シニスターの話を始めましょう。今日は一人一人に意見を述べてもらいます。まず、リッチマンさん」

リッチマン「はい。昨日の夜は、一睡もできませんでした。もし、たくさんのドームが壊されたら、食糧はどうなるのかと」

ホール「ドームが吹き飛ばされたら、火星の人類は終わりだ。どこにも逃げ場がないから」

アルメンダリス「人類は死に絶えるという前提の話はやめよう。せめてギリギリまで生き残るつもりで話をしよう。

そのために集まったんだから。

まず、シニスターによる被害は、上空100kmの大気が剥がされるという設定で話そう。

火星に落下するなどということは、考えてもしかたないから」

コートニー「そうよ、最初から負けるつもりの話はしたくない」

シングルトン「そうね、その線で」

ローリン「まず、避難場所だが、今現在の戸建て住宅は重力の低さから軽量に作られている。

シニスターが70kmの高度でやってくると吹き飛ばされるかも」

リッチマン「今の農業ドームの中には、貨物船を改造した家屋が232戸あって、全部で5000人ほど住める。

これは移住し始めたころからの緊急住居で、住み心地は良くないが、生きてはいける。

夜はこの貨物住宅を密閉して、人間のはき

出す二酸化炭素をドーム内に放出して、植物の呼吸を助ける。

リッチマン「それから今ある農業ドームの外壁が痛み始めてます。これを使えば、あと15000人の住居を」

ローリン「最近補修用の粘性の高いポリエステルが開発されたから、ドローンでそれを吹き付けるとどうかな」

衝撃波で全部敗れるかも」

アルメンダリス「風速100mの風にも耐えると聞いている。いいんじゃないか」

リッチマン「ボリエステルはトウモロコシやサトウキビの繊維由来で、相当備蓄があるから」

シングルトン「酸素はどのくらい減るのかしら」

ローリン「やっぱりドームの外の活動は無理だな」

アルメンタリス「外の仕事はロボットに任せ

よう。

発電所や上下水道、工場設備、特に製鉄所の安全も最優先で」

シングルトン「じゃあ、早速各委員会を立ち上げて、工事日程を組みましょう。なにしろ3年しかないから」

T　3年後

○鉄男の家（朝）

○居間（朝）

さくらとあやめ姉妹、鉄男とソアと、一人息子のジョー（2）が食事を終えてお茶を飲んでいる。

ジョー「ママ、早く幼稚園へ行こうよ」

ソア「まだ8時だから、幼稚園開いてないわよ」

ジョー「それでもいいから行こう」

鉄男「ジョー、無理言うんじゃないよ。それならダディと遊ぼう」

ジョー「うん、遊ぼう」

鉄男「なにして遊ぶ」

ジョー「バルーン投げ」

鉄男、ポケットから地球から持ってきたゴム風船を取り出し、膨らます。

鉄男「そら、投げるぞ」

ジョーのほうへバルーンを投げる、ジョー、器用にボールの前へ行って父親の方へ叩き飛ばす。

バルーンは届かず、鉄男は滑り込んでたたき返す。

さくら「おばさんも」

といってバルーンをジョーのほうへ。

ジョー、受け損ねて転び、泣き出す。

さくら「あらあらごめんなさい。お願いだから泣かないで」

ジョー「おばさんの馬鹿！」

鉄男「これ、そんなこと言うんじゃない。いつも二人のおばさんが遊んでくれてるじゃないか。

わがまま言うと、もう誰も遊んでくれないぞ。

それでもいいか」

ジョー「いやだ」

鉄男「それならおばさんに謝りなさい」

ジョー「さくらおばさん、ごめんなさい」

さくら「いいのよ」

といってジョーを抱き上げる。

あやめ「ジョーのおこりんぼさん。

幼稚園行っても喧嘩しないでね」

ジョー「うん」

ソア「お二人ともいつもありがとう。

明日には二人とも家へ帰るのね。

ずっといて欲しいわ」

鉄男「そうもいくまい。

それぞれご主人がいるんだから」

そのとき鉄男の携帯電話が。

鉄男「ローリン、おはようございます。

なんですか。

え、そうですか。

じゃすぐ行きます」

ソア「なんなの？」

鉄男「いや、わからない。もう行くよ」

ジョーの頭を撫でて

鉄男「泣かないで遊ぶんだよ」

○市長室（朝）

鉄男が入って行くと、市長とローリンだけが。

ローリン「早かったな」

鉄男「そうでもないですよ」

そのときいつもの面々が入ってくる。

シングルトン「みなさん、朝早くごめんなさい。

たいへんなニュースが飛び込んできたの。

シニスター小惑星が、火星に衝突するというの。

細かい軌道計算で今から2週間後に」

アルメンダリス「なんですって！」

一同唖然として、声も出ない。

リッチマン「何ということだ」

ローリン「市を直撃ですか」

シングルトン「いいえ、直撃するのはオリンポス山です」

リッチマン「それだと、どうなるんですか」

アルメンダリス「砕け散った岩や砂が噴水のように火星全体に飛び散り、すべてを覆いつくします。

舞い上がった塵は、2年は大気に留まり、火星は昼も暗く、陽の光も射さず、気温は下がり続けるか、あるいは空中のチリが太陽光で温められて加熱する」

シングルトン「東キャナルも」

アルメンダリス「そう、影響を受けます」

ローリン、立ち上がって窓の外を見ながらため息を。

鉄男、椅子に崩れるように座り込み、頭を抱える。

暫くして、鉄男、話し始める。

鉄男「一つだけ助かる方法があります。ソアと結婚し、子供もできた今、口に出すことがためらわれました。しかし、今となっては、その妻と子を助けるためにもやらねば・・・」

ローリン「もしかして君は・・・」

鉄男「ええ、そうです。テレポーテーションです」

リッチマン「まさか！」

ローリン「それは私も考えないではなかったが、今回の問題はそれで解決できるとは到底思えなかった。

小惑星の重さは、多分1兆トンは下るまい」

鉄男「今まで私が自分の体と共に移動できた最大のものはマーズ号です。その過程で判ったのは。移動できる重さや大きさは関係ないということです。それが1トンでも、1兆トンでも。問題はその物体を目で見て認識できるかどうかにかかっています」

アルメンダリス「それじゃ君は」

鉄男「視覚で認識できれば・・・」

ローリン「地球から科学者チームがシニスター観測に、ひと月前にここに来ていることは知っているね。

彼らは新型核融合ロケットでやって来た。

その速度は毎秒最大21km。

それで前もってシニスターの軌道到達点に移動して、そこから火星に向けてシニスターと伴走できれば」

鉄男「視認できる」

シングルトン「しかし岡田さん一人にそんな犠牲を強いるのは・・・」

鉄男「強いられて行くのではありません。

ただ自分の妻子をたすけたいためです」

ローリン「この際、岡田君に頼ろう。

最後の希望だ」

鉄男「それで、一つ問題があります。

御存じのように、宇宙服は非常に動きにくく、船からシニスターに飛び移るとき、宇

宙服のグローブでは、シニスターに摑まることはまずできないと思います。

なにかこれを解決できる方法が」

ローリン「そうか、よし、コールに頼もう。彼ならなにかいい方法を見つけるだろう」

○鉄男の家

鉄男「ただいま」

ソア「お帰りなさい」

鉄男、テーブルの椅子に頽れるように座り、ため息をつく。

ソア「どうしたの、なにかあったの」

鉄男「そうなんだ、実は」

ソア、お茶を淹れながらため息をつく。

ソア「やっぱりあなたがいくのね」

鉄男「いつも言っているように、私がここにいるのは、そのためだ。

君と結婚する時、このことは話したはずだ」

ソア「それは判ってる。

でもそれが現実となると・・・」

鉄男「許してくれ。
どうしても君と結婚することを諦められなかった」

ソア「あなたを責めてるんじゃないの」

そのときジョーが家に入ってくる。

ジョー「ママ、なにか食べるものない？」

ソア「え、ああもうこんな時間。
急いで夕食作るから、待っててね」

ジョー「うん」

鉄男「今日は何して遊んだの」

ジョー「ダディからもらったゴム風船でみんなと遊んだ」

鉄男「そうか、あれおもしろいな」

○東キャナル宇宙空港

空港には、ずんぐりむっくりの火星探査船フュージョン号が発射間際。

○フュージョン号先端の操縦室

船長メイシー（４９）と鉄男が操縦席に。

カウンドダウンが始まり。核融合炉の響きが。

鉄男「乗員の皆さんは？」

メイシー「隣の観測部屋に張り付いている・こんな小惑星観測のチャンスは滅多に無い。だから、この機の操縦はコンピューターに任せてる。

その補助が私だ。

さあ、出発だ」

○宇宙空港

フュージョン号が登ってゆく。遠くから市民が見送っている。

機はオリンポス山を越えてゆく。

○火星上空

○操縦室

モニターに火星周辺にラインが。

メイシー「これがシニスターの軌道だ」

明るく輝く木星の側を青い軌道が描かれる。

その線の上を青い点が黄道に向かって、少しずつ移動している。

メイシー「シニスターは一日に181万kmずつ進み、この調子で行くとあと5日で火星に着く。

今からこの船は最大速度でシニスターを迎えに行く。

そして計算上2日に追いつく。

そこから方向転換して、シニスターと並走する。

その速度が揃ったときが、君のチャンスだ」

鉄男「わかりました」

メイシー「ごめん。隣でみんなと食事をしてくる。

君はずっと流動食で、固形物を食べる私たちを見ているのは苦痛だろうから。

君の食糧はこの箱のチューブだ。

じゃ、ちょつと行ってくる」

鉄男「はい、わかりました」

T　2日後

○操縦室

フュージョン号の後方を映すモニターに、急速に近ずくシニスターの陰。

メイシー「岡田さん、そろそろエアロックへ」

○エアロックの中

メイシーの声がスピーカーから。

メイシー「今から気圧を75%に下げてゆく」

鉄男「はい、どうぞ」

T　1時間後

メイシー「宇宙服を着て減圧してくれ」

鉄男「OK」

鉄男、ヘルメットを着け、減圧スイッチを押す。さらに補助アームをセット。

T　さらに1時間後

メイシー「岡田さん、窓から外を見てくれ」

鉄男「ああ、火星の反射光でシニスターが見える」

メイシー「火星衝突まであと2時間。始めてくれ」

鉄男「わかりました」

鉄男、鉄腕（アイアン・アーム）の留め金を解除。

メイシー「その鉄の腕は、君の脳波で動くんだね」

鉄男「ええ、コールさんというエンジニアが作ってくれました」

鉄男、頭の中で腕に命令を伝える。

曲げたり掴んだり、最後は胸の前で折りたたむ。

鉄男、エアロックの開閉ボタンを叩く。

扉は開いて、鉄男の体は空気の流れと共に真空中に。

後ろで隔壁が閉じる。

鉄男、目をこらしてシニスターを見る。

次の瞬間、シニスターのすぐ前までテレポート。

鉄男「腕を伸ばし手を開け」

その状態でテレポート。

そして爪が岩肌に触れるか触れないかのときに

鉄男「岩を掴め」

両手の鉄腕のつめが岩に食い込む。

鉄男「手を離せ」

鉄男、星空が遮られている、頭の上の岩の境目にテレポート。

鉄男「岩を掴んで、腕を縮めろ」

その動作で鉄男の体は持ちあげられ、岩の向こう側が見えるようになる。

鉄男、サンバイザーを降ろして太陽の位置を確認。

さらに右手首の鏡で後方を観察。

鏡には、近づいてくる大きい火星が見える。

鉄男「さあテレポートだ。
鉄腕、岩をしっかりつかんでおけ」
鉄男、太陽の方向を凝視。
そしてテレポート。
次の瞬間、鏡の火星は５００円玉ほどに縮んでいる。
鉄男「成功だ、よかった」
それから、腰の収集ボックスを開く。
鉄男「鉄腕、近くの小さな岩をこの箱の中に入れろ」
箱が一杯になると。
鉄男「鉄腕、手を閉じ、腕を私の体の前で固定しろ」
それから箱をカチンと閉じて、自身の腕でシニスターを押しやり、宇宙空間を漂う。
さらに体を回転させて火星に向き合う。
鉄男「フュージョン、フュージョン」
メイシー「岡田さん、驚いたなあ。

シニスターが遥か彼方に飛んで行った。

さあ、帰って来るか」

鉄男「38万km離れているので、あなたの船が見つけられない。

どうかあなた方は火星に戻って欲しい。

私は単独で火星に向かう」

メイシー「そんなことができるのか」

鉄男「やってみる。

それしか方法がない」

メイシー「じゃあ、成功を祈る」

鉄男「あなたも」

鉄男、ため息をついて、口元のストローから水を飲む。

左腕のインジケーターで、酸素残量を確かめる。

鉄男「あと3時間。

思いのほか使ってしまった。

シニスターでゆっくり移動したのが響いた。

さあ、帰ろう」

鉄男、火星を睨みつける。

○火星上空150km

現れた鉄男、ゆっくりきりもみで落下。

加圧ボタンを押す

そして頭から落ちてゆく。

しばらくして水平にテレポート。

下に亀裂のある西カンドール・カズマを発見。

遥か遠くにオリンポス山。

ただちにテレポート。

○東キャナル宇宙空港

上空200mで着陸のため、細かいテレポーテーションを重ねる。

あと5mというところで鉄男バランスを崩し、左肩から落下。

着地時にボキッという音。

鉄男「ウウッ」

肩を労わり、右に寝返る。

激しい痛みに失神する鉄男。

空港の管理人が数名駆け寄ってくる。

〇東キャナル中央病院

個室の鉄男、目が覚める。

ジョー「あ、ダディが起きた！」

ソア「まあ！」

覗き込む二人。

ソア「どう？　具合は」

鉄男「ああ、ここは？」

ソア「病院よ」

鉄男「生きてるのか？」

ソア「今話してるのが生きてる証拠」

そこへ駆けつけた医師。

ジャーナ・ムベキ（62　中央病院院長「大丈夫かい？

痛むかい、肩」

鉄男「肩って」

医師、少しためらいながら

ムベキ「君の左肩は落下の衝撃で完全に壊れてしまった。

手術で根元から切り取った」

鉄男「えっ？」

医師「ショックだろうし、日常の不便も増えるだろうが・・・」

鉄男「何度も死の瀬戸際まで行った私には、生きているだけありがたいです。どうぞお気になさらずに」

ソア「私がいるから」

鉄男「うん。

でも何も痛くないけど」

ムベキ「鎮痛剤を投与しているけど、薬が切れる時が一番痛くなる」

鉄男「どのくらい続くんですか」

ムベキ「ほぼ5週間続き、それでも治まらないときは神経の手術で痛みをとめる」

そのときシングルトン市長が入ってくる。

シングルトン「ああ、岡田さん、大変なことになってしまったのね」

鉄男「どうぞご心配なき様。

先生が手当てしてくれてますから。
それよりシニスターの影響は残ってるんですか」
シングルトン「いいえ、衝突がギリギリで回避できて、みんな喜んでるわ。本当に有難う。それに今度のことで、あなたの秘密がバレてしまったの。静かな生活は・・・」
鉄男「そうですか。仕方がありません。何よりも私たち人類が生き残れたことの方が大切です。お気になさらずに」
シングルトン「あまり長くなるとお体に触るでしょうから、今日はこのへんで。どうぞソアさん、お困りのことがあったら話してね、じゃ、これで」
一礼して出てゆくシングルトン。
ソア「ああ、それから、コールさんが、退院

したあと、頭で考えただけで動かせる義肢を作ってくれるって。

それからフュージョン号の船長さんが、たくさんの岩石サンプル、ありがとうって」

鉄男「あ、そう」

ソアとジョー、残った鉄男の右手に触りながら、窓から見える火星の緑の空を仰ぎ見る。

完結